

つむぎだす 若者の記録

～国内外の学生による10年目のダイアログ～



Project San-Eleven

この冊子は「Project San-Eleven」が運営する投稿型のウェブサイトに寄せられた、震災の体験談や寄稿記事をまとめたものです。そのため一部、ウェブサイト掲載当時の文言もごさいます。

※「3がつ11にちをわすれないためにセンター」が主催する展覧会「星空と路」(2022年3月9日～4月24日)の展示物として制作されました。

表紙の花：カランコエ

表紙中央の赤く、凛然と咲く花は「カランコエ Kalanchoe」と呼ばれ、“幸福を告げる”、“沢山の小さな思い出”の2つが主な花言葉です。Project San-Elevenのイメージカラーであるオレンジと青に因み、多くの方々からいただいた体験談や思い出(カランコエ)を我々(青のリボン)で束ねました。

Project San-Elevenが皆に力を与える希望の光となって幸福が届けられますように。

目次

- 02 はじめに
- 04 若者たちから届けられた手記
- 33 東北を「知る、行く、感じる」
- 女川、陸前高田、石巻を訪れて -
- 51 震災対談
- 58 Podcast
- 59 編集後記

はじめに

2018年、大学進学を機に初めて訪れた東北。震災について触れたのは、ここで何が起きたのかを住民として多少は知っておかなければと、何気なく思ったことがきっかけでした。

震災について学んだりボランティアに参加したりする中で、知れば知るほど「私にできることなんて何も無いのかもしれない」と痛感する日々でした。

一方で、県外の人や海外から来た友人の言葉に傷つくことがありました。

「仙台は危なくないの?」「仙台から来たの?あの震災の街の?」

心ない言葉たちがなぜ未だに溢れているのか。かつての私もそうだったから、わかるのです。

無知ゆえだと。

だから知って欲しい。

でも、何もできなくて、悔しさだけを滲ませていました。

結局、何もしないままに時は過ぎていきました。

そうして2020年3月11日に至り、テレビを見ながらぼんやり無力感に浸っていた私は、SNSにこんな投稿をしました。



ただ、もどかしさを書き連ねた独り言でした。それなのに、「私も何かしたい」と賛同するメッセージが次々と、国内外の学生たちから集まってきました。

東日本大震災当時は小中学生で、「何かしたかったけど何もできなかった」大学生や留学生たち。

2020年4月のコロナ禍の混乱の中で、「何ができるかを探そう」と立ち上がった私たちはProject San-Elevenを結成しました。フィンランド出身の学生が名付けた日本語と英語を組み合わせたこの名前には、多様な地域から来た学生

たちが集い、「東北と世界、今と過去、そして未来を繋げる架け橋になる」というビジョンを掲げ、ともに行動を起こしていく決意を込めました。

「まずはあの日のことを話せる『場所』を作ろう」

住む場所や被災の度合いにかかわらず、どんな人でも震災をめぐる思いを打ち明けられる場所。

私たちに何ができるかを対話を重ねながら探し続けた、私たちが見つけた1つの答えでした。

プラットフォームとしてのウェブサイト運営とSNSでの発信活動を通じて、半年間で5つの国と国内の11の地域から50本の体験談と4名の書き手による寄稿記事が集まりました。その後は、文字だけではなくPodcastによる音声配信、オンラインイベントでのリアルタイムトーク、仙台・東京の公共施設での展示というように活動を拡大しました。

2022年3月の主要メンバーの卒業に際し、団体としての活動に幕を下ろすことを決めました。ウェブ上に残してきた私たちの元に集まった言葉たちは、いつか情報の海にのまれてしまいます。活動の幕引きとともに誰の目にも触れなくなってしまうことは惜しいと思いました。冊子という形に残すことで、

私たちの元に届けられた言葉が、時空を越えて誰かの元へ届き、共感を広げ続けることができるかもしれない。そうした思いのもと、これまでお世話になった方々の協力を得ながら、冊子を制作しました。

「東北と世界、今と過去、そして未来を繋げる架け橋になる」

このビジョンを掲げて歩んできた私たちの軌跡と、紡がれてきた幾重の言葉たちが、いつかの未来で、この冊子を手にとった誰かに届くことを願っています。

2021年12月

Project San-Eleven 代表 峯村 遥香

若者たちから 届けられた手記



当時10代~20代だった方々から2011年3月11日の記憶を語った手記が寄せられました。日本や世界各地から届けられた50本の投稿のうち、ここでは公開許可を得られた34本を掲載しています。

自分に何ができるのかと悩みこれまで震災について語ることをためらってきた若者、忘れないでほしいとの思いから辛さを忍んで記してくれた人。胸の内に抱えてきた感情や記憶が、ありのままに書き連ねられた体験談です。

※これらの手記は2020年4月~12月の間に寄せられました。地名の表記は震災当時の居住地です。

宮城県大崎市

自分は宮城県の大崎市っていう、県北の内陸部の街で被災した。

自分の街は田んぼを埋め立てた上につくられたようなところで、その関係もあって地盤がとても緩い街だった。その影響で震災発生時の揺れはとても激しく、揺れが収まった後に学校を出たら、あたり一面地下から泥水が湧き出していて異様な光景だったことを今でも覚えている。

自分の街で特に被害がひどかったのが液状化で、震災の2~3年後の時点ではまだ道路のひび割れがそこら中に残っていた。ひび割れによる地面の起伏があちこちにあったため、自転車で少しスピードを出すですぐにカゴの中の荷物が飛び出した。

今ではだいぶ復興が進んだが、地面のひび割れ部分に流し込まれた新しいアスファルトを見るとまだ当時の傷跡を感じる事が出来る。

東京都

当時私は都内の中学校に電車で1時間かけて通っていました。その日はたまたま用事で近くに来ていた母が迎えに来てくれたものの、電車はすべてストップ。歩いて帰ることになりました。状況が一切分からなかったのも、手持ちのラジオを買って聞きながら歩きま

した。そこで初めて「大変なことが起きているらしい」とわかりました。歩いている途中で外壁が崩れたビルを見かけて、だんだんと実感が湧いてきたという感じでした。

夕方から歩き始めたものの、夜になるとどンドン道が混み合ってきて、大きな駅の近くなんかは文字通り人が溢れていました。震災のテレビで帰宅困難者の様子が流れる度に、自分もあの群衆の一人だったんだと思い出します。

途中コンビニで水やお菓子を買ったのですが、そこで携帯電話の充電をさせてくれたのを覚えています。あれはありがたかった。電話は一切通じませんでした。メールはなんとか届いていたから。充電を待つ人達は皆一様に疲れ切った顔をしていて、それでもある程度まで充電できたら数少ない充電ケーブルを他の人に譲っていました。今思い返しても不思議な空気が流れていたと思います。

そうしてようやくいつも使う乗換駅にたどり着きました。夜の10時か11時ごろだったでしょうか。いつもなら電車で20分の道のりが、休憩しつつですが6時間ほどかかっていた。かろうじて営業していたファミレスで食事をさせてもらい、徹夜で歩くことも覚悟していたときです。店内にいた若い男性グループの話し声が聞こえて

きました。「〇〇線が運行再開するらしい」当時の私はよく知りませんでした。電話は通じなくても SNS は動いていたようなのです。SNS で発信される情報を語るお兄さんたちに着いていく形で私と母も店を出て、駅に戻りました。そうして電車に乗って帰宅することができたわけですが、電車もゆっくりの運転でしたから、実際家につく頃には深夜の1時か2時くらいだったかと思います。

疲れ切ってはいましたが、家があんなに暖かく、安心する場所だと感じたことはありませんでした。

後日談ではありますが、この2年後に修学旅行で岩手に行くことになります。震災時に救援拠点となった遠野で民泊をして、当時の状況を地元の方にお話していただきました。

大変だったこと、皆で協力して頑張ったこと、その一方で地元の方の記憶の風化が問題になっていることなど、震災直後とも言える時期に伺えたのは本当に貴重な経験だったと思います。

宮城県仙台市若林区南小泉

地震が起きたのは、総合の授業中のことだった。

机の上のものが床に散乱する音、本棚が落下する音、誰かの叫び声、そして地響きなど色々な音や衝撃が広がっていた。雪の降る寒さが厳しい校庭に避

難し、親の迎えを待った。正直、当時小学4年生だった私は、「ちょっと大きな地震が来ただけだ」「大きな揺れはぐらら（地震体験車）で経験したことあるし大丈夫でしょ」とたかを括っていた。「今日の英会話は休みかな？」などと呑気に考えていた。当時の私は、地震の揺れ自体には地震体験車などで慣れていたが、地震が何を引き起こすのかまで理解できていなかったのだ。帰り道、歩き慣れた通学路は、ブロック塀が倒壊していたり、地面にヒビが入ったりと景色が一変していた。家に帰ると、色々な家具が倒れていて、ベッドの上にタンスが倒れていた。「もし寝ている時だったら」と考えた途端、急にこの地震が恐ろしいものであったのだと認識した。発電装置を利用して、テレビをつけると、自分が今いるところから10キロ弱離れたところには津波が来ていることがわかった。また、翌日の新聞には、一面が火の海になっている写真が大きく載っていた。地震でこんなことが起こるなんて、という強い衝撃を受けたのを覚えている。地震から何週間か経過した時に、少し海の方面に行くと、人が乗車中に流されて亡くなったと思われる車がたくさんあったのが忘れられない。地震が起こってからしばらく経ってからの方が、地震や原発事故、津波の恐ろしさを実感することが多かったように思う。

もし、地震が起こったあの瞬間に、今の私がいたとしたら、これから起こることを想定して適切な行動を取ることができるだろうか。日頃から地震に対する物心両面の備えができていれば、なんとか正しい行動ができると思う。多くの方が物心両面の備えをするために今の私にできることは、地震から10年経過した今だからこそ、地震を経験した生の声を伝えることで、「地震は揺れだけではなく、その後に起こることも含めて怖いのだ。」と再認識させることだと思う。今回の体験談がいつかの誰かの役に立つことを願いたい。

フランス / France

I was in France for a short exchange during that time and I remember that they constantly showed the news (with videos of the tsunami and the nuclear catastrophe) on the TV. I couldn't understand but it looked horrible. There were a lot of aid organizations raising money for Japan!

私はその時、短期の交換留学でフランスにいて、テレビで（津波や原発被害の動画を含む）ニュースが度々放送されていたのを覚えています。内容はよく理解できませんでしたが、ニュースはとても恐ろしく見えました。当時は日本のために支援金を集めるたくさんの援助団体がありました！（日本語訳）

宮城県仙台市宮城野区岩切

地震のときね、私、友達と下校中で細い路地を歩いてたら「なんか変な音がする」と思った途端に揺れだして目の前の家が倒れて来て車が潰れて、「お母さんは大丈夫かな、妹は無事かな、もうみんなと会えないのかな」って思っただけで怖かった。その日の夜は家の中も上靴で過ごして揺れるたびに外に出て全然眠れなかった。でもその夜の星がとても綺麗だったことは今でもよく覚えてる。

地震のときは郊外に住んでたから電気とか1週間以上復旧しなくて、親戚の家にお風呂を借りに行ったらそこはもう電気もついて、水もあって、暖かい部屋で普通の生活をしててうちは大変なのに……って悲しくなった。その時初めてTVをみて自分の周りで起こってた出来事を知って呆然とした。

スーパーの行列に並んだり、避難所に物資貰いに行ったりする生活が続いてずっとこのままなのかなって不安になってた。

今でも地震とか津波の映像を見ると涙が出てきて止まらなくなって見られませんが。

宮城県仙台市青葉区

2011年3月11日 その日は小学校にいました。5時間目の授業中だったよう

な気がします。
震災の前には余震が続いていたため、地震が起きた瞬間にみんなが机の下に潜りました。
隣の子と怖いね、なんて小声で話したり。男子はこっそりジャンケンしてる人もいたりして。
私達はまだ事態の深刻さを知りませんでした。
地震が収まって校庭へ避難した後は、保護者が迎えに来るのを待って。私はお母さんがすぐ来てくれました。
3月なのに雪が降る中、上靴で家に帰りました。帰る途中のコンビニが人で溢れていた。
家に帰ると祖父母が迎え入れてくれて、父も無事に帰ってきて。
幸いにも我が家は水道だけは通ってました。電気は止まっていたのでテレビも電気もつかないので、真っ暗になったらやる事がなくて18時くらいには寝て。
昼は物置にあった七輪を使ってヒーターの代わりにしたりして、電気の復旧を待ちました。
当時はガラケーでワンセグ放送が見れました。でもあまりにも画面が小さくて現状がわからなくて。
震災から3日後。電気が通ってテレビがつくと、想像もしなかった世界になっていました。(え?どここれ……?)見た当時はそう思いました。自分たちの住む県が、東北がこんな事になるなん

て思っていないでした。テレビをつけてしばらく家族のみんなは絶句でした。
その後は原発の事故の報道が多くなり、仙台にももう住めないかもしれないと両親が話しているのを聞いて嫌だと泣いたり、近所のスーパーが1人10点までしか買えなかったり……断片的な記憶しかありません。
東日本大震災は1000年に一度とまで言われる大災害でした。私は宮城県に住んでいましたが電気が止まったことくらいでほとんど被害はありませんでした。
それでも忘れられないし忘れてはいけないうことだと改めて思っています。あの日からもうすぐで10年。10年という日々は長くも短くて、未だに記憶にあるくらい大きな出来事でした。経験していない人にも、東日本大震災を忘れないでほしいです。

アルゼンチン

当時小学6年生だった自分はアルゼンチンに住んでいた。
朝起きたら両親が「大変なことになった」と言い合いながらテレビにかじりついており、つられて見てみるとそこには爆発する福島第一原発の映像が繰り返り流されていた。
日本で大規模な地震、津波があったことは海外でもほとんどの放送局が報道

していて、地球の裏側に住んでいた自分も当時の様子をリアルタイムで追うことができた。
インターナショナル校に通っていた自分はその日学校に行くのが気まづかったが、意外なことに先生や友達もいつも通りに接してくれた。今思えば大人の先生方は自分に気を遣ってくれていたのかもしれない。
その後、日を追うにつれブエノスアイレスでも震災のチャリティーイベントなどが開かれるようになり、復興への支援の広がりを感じた。

宮城県仙台市若林区蒲町

当日から数日間は、通った小学校に避難してただけど、夜になって外が真っ暗なはずなのに明るいものが見えて「何か燃えてる……海の方かな」って家族と話してたんだよね。
次の日、廊下に新聞が貼り出されて沿岸部がすごい被害を受けてることとか気仙沼が燃えてたこととかを初めて知って呆然とした覚えがある。
あと校舎の方なんだけど、うちの小学校、全壊認定されちゃったから使えなくなったんだよね。
で、近所の中学校の体育館を仕切って教室にしたの。最初は仕切りもなく、他学年の様子が全部見える感じだったかな。しばらくして段ボールで仕切りが出来て、ちょっとだけマシンにはなっ

ただけ。
もともと体育館だからエアコンなくて蒸し風呂みたいに暑かったし、午後になると西日がさしてきて眩しくて黒板が見えなかった。でも自分より下の学年もおんなじ環境だから、勉強できるってだけでも感謝しなくちゃ、って。6年だったしね。

夏頃にやっと仮設が出来て、できたての校舎に物を運んだりとかを生徒みんなでやったこともあった気がする。図書室の本とか、そういった実技の物品とか。旧校舎が壊れてるからそこに体育館のマット敷いて、通っても危なくないようにして、教師と6年主体で運び出した。

たった数カ月しか経ってないのに校舎は全然変わっちゃって、懐かしさってよりかは不思議な感じがしたかも。一階とか砂が入り込んで、ガラスとかもあるかもってことで外靴で入ったから余計にそう思ったのかな。

私たちは仮設で卒業したんだけど、仮設は意外に快適だったよ。体育館と比べてたからかもだけど(笑)。
エアコンから霜が降ってきたりとか、ちょっと音聞こえやすいから音楽の授業とか難しかったりとかいうことはあったけど。

卒業してから新校舎が建って、そこにも卒業生として物品の運搬に行ったよ～。旧校舎は春休みのうちに取り壊されちゃって、寂しさは確かにあったかも。

新しい学校はすごく綺麗だけど、まあ私達には思い入れとかは全くないので「学校変わっちゃったね」って言い合ってた。実家に住んでるから普通に学校のそばは通るんだけど、校舎も遊具もぜんぶ変わっちゃったから、自分たちの母校はなくなっちゃったんだなーってちょっと切ないときはあるかな。

福島県いわき市

小学5年生だったので、テレビで流れる震災を身近に起きていることだと思っていなかった。地震が起きたら、はしゃいでいるような子供だった。震災中のテレビは「余震、放射能、津波」ばかり。同じCMやニュースが繰り返し放送されているのを見ていたのを今でも忘れられない。それをみて辛くなったのを覚えている。放射能についても、甲状腺検査や土壌調査など初めてだらけなことでも不安だった。

東京都調布市

震災当時、東京に住んでいた僕は小学校で地震に遭いました。東京の震度は震度5弱だったそうですが、たまに経

験する震度4のたった一つ上の大きさとは思えないほど大きな揺れで、何年たってもあの感覚は忘れません。

金曜日の午後、算数の授業中でした。僕の通っていた小学校には、偶然にも震災の数か月前、緊急地震速報のシステムが導入されたのですが、それが揺るよりも先に大きな揺れが来ました。

ゆーらゆーらと、今まで経験したことのないほど、ゆっくりと大きく揺れたのをよく覚えています。そして長かった。5分、10分くらいずっと机のしたにいた気がします。揺れが小さくなったと思ったらまた大きく揺れだして、の繰り返しで、酔っているような感覚になり、自分が揺れているのか揺れていないのかよくわからない状態になりました。

女子の中には泣いている子もいました。向いの席にいたいつもクラス元気な子も、自宅にいるおばあちゃんのことを心配して泣いていて、「絶対大丈夫だよ」と慰めることしかできませんでした。

揺れが収まって机の下から出た後も、小さい揺れは続きました。人生でこんな地震に遭うのは初めてで、これはただことではないと思いました。でも、僕の頭の中は比較的冷静を保っていた気がします。

揺れが収まってきたころ、校庭に避難するよう放送が入りました。僕が通っていた小学校では、月に1回避難訓練

をしていたので、避難して整列するのにあまり時間はかかりませんでした。

正直、校庭に避難したあとの記憶はあまりありません。揺れが来てからの十数分の記憶が自分にとってあまりに強烈だったので。

学校の方針は、親御さんが迎えに来た生徒から下校ということになりました。地震から1時間後くらいに、母親が車で迎えに来てくれました。オレンジ色の防災頭巾をかぶって帰ったのを覚えています。共働きの家庭の子のなかにはなかなか迎えがこなかった子もいたようで、最後の生徒が帰ったのは日付が変わるころだったと聞きました。

アメリカ / the United States

I was young at that time but I remember watching news footage filmed from a helicopter that's broadcasting the actual tsunami scene. Then there was also the Fukushima power plant meltdown. That was also the first time I ever heard about Sendai.

私は当時は幼かったのですが、実際の津波のシーンを中継するヘリコプターから撮影されたニュース映像を見たことは覚えています。その後、福島の発電所のメルトダウンのニュースもありました。仙台のことを聞いたのはこの時が初めてでした。(日本語訳)

宮城県仙台市若林区荒浜

震災は小学6年生の卒業手前に経験しました。私はその時荒浜海岸から数キロの地点に住んでいました。

津波こそまぬがれたものの、避難所だった小学校に泊まり、帰宅すると電気ガス水道全て止まっていました。近所のスーパーには購入制限がかかり、数個のパンを買うために姉と3時間並んだことを今でも覚えています。

震災の影響で卒業式は中止、中学生生活は体育館をダンボールで区切った教室から始まりました。

イレギュラーなスタートを切った中学校生活の、スタートでのポジティブな思い出の一つは、米軍の音楽隊が演奏会を開いてくれたことです。遠くからかけつけてくれて演奏を披露してくれるだけでなく、開演前も開演後も震災を忘れられるほどのおもてなしをしてくれました。

反対にネガティブな思い出は、津波の被害にあい長い避難所暮らしを強いられた友人に対して「風呂に入っていないから汚い」など扱ういじめがあったことです。

長崎県

あのと私には中学生だった。何気なく通った学校の職員室前の廊下。職員室のガラス窓越しに見えるテレビを見よ

うと、たくさんの人が群れていた。何事かと思って覗いてみると、同じ地球で、日本でおこっているとは思えない、言葉に表せない凄まじいものがうつっていた。

現実味を感じられないまま帰宅した。自宅のテレビに映るのは、職員室のテレビでみたものと同じ。建物も人も全てが飲み込まれていった。屋根の上で助けを求める人の姿も映った。

彼らのために何かしたい、できることなら助けたい。でも、何もできない自分に歯痒さを感じた。同時にまだ現実だと受け入れられていない自分もいた。そんななか学校で募金活動があった。周りの友達に驚かれながらも、母親にもらった一万円を募金箱に入れた。そのとき自分にできることはこれだけしかなかった。

今でも、この出来事を思い出すと、現実なのかそうじゃないのかわからなくなる。きっと10年が経とうとしている今でも、現実だと受け入れられていない自分がいるのだろう。今、この話をパソコンで入力する指も震え、心臓も大きな鼓動を打っている。

神奈川県

当時小6で、目の前が海の立地に住んでた友達一家が少し高台の我が家に避難してきて3.11の夜は過ぎしました。その時に、友達の家遊びに来てた女

の子もきて、その女の子はお母さんが都内で帰宅難民になってしまっていて、とりあえずってことで泊まったのを覚えてます。次の日の朝、お母さんがめっちゃ疲れた顔でタクシーで帰ってきてすごくほっとした顔して挨拶してたの覚えてます。で、記憶は福島第一原発の水素爆発のニュース映像に飛んで、それ見た父が、「だめかもしれない」ってつぶやいたのが心に残ってる。水素爆発だって分かるまでは、ほんとに原発？てきな爆発だと思ってたから、もう東北には立ち入れないし、風向きによっては後遺症とかあるかもしれない、みたいなことを聞いて、大変なことになったなあという記憶があります。

宮城県仙台市泉区南光台東

地震が来たとき私は小学5年生で、ちょうど授業中だった。習字をやってたから教室中に墨汁がぶちまかれていたし、隣のクラスのメダカは水槽がぶっ壊れて廊下で跳ねていた。

地震が収まるとすぐに体育館に避難した。しばらくして保護者が続々と来て、友達は全員帰って行った。1人残された私は、あかねこ漢字ドリルとあかねこ算数ドリルで時間を潰して待っていたが、父と伯母は忙しく、母は東京に単身赴任していることを思い出した。祖母しか私の元へ来られないなあ、と思い、とてもじゃないけど老人が来ら

れる距離ではないと判断し、解き切ったあかねこドリルたちを体育館に捨てて一人で帰った。家に着くと仏壇が倒れていたり、砂壁が崩れていたり、散々だった。急いで祖母を探すが、見当たらない。動いても会えないと思い、玄関前で縄跳びをして待っていた。二重飛びが終わり、はやぶさが終わり、燕返しをやるうか、というときに祖母が帰って来た。どうやら小学校まで行ってくれたらしい。夜もいい時間になったとき、父と伯母が帰って来た。夜空はやたらと綺麗で、しばらく主食となった曲がりせんべいには頭が上がらない。ありがとう、曲がりせんべい。

福島県西白河郡

震災当時は小6で卒業式を直前に控えて教室の大掃除をしていた。教室から机を廊下に出して雑巾がけを始める時に地震が来た。教室には机がほとんどなかったから1つの机に2、3人が入り込む状態で揺れをしのいだ。廊下にあった水槽が倒れ、教室に積んであった絵の具セットが落ちてきた。やっと揺れが収まったところでランドセルや体操着を持って校庭に避難した。避難訓練でやったことが本当に生きると思わなかった。校庭に出たら地割れあり、マンホールが飛び出て電柱も倒れていた。下の学

年の子たちの多くは泣いていた。本当に怖かったんだなと痛感。

小学校には父が職場から迎えに来てくれた。弟と一緒に車で家に帰った。家に帰ったら玄関にひび割れがあって、中に入ったら本やら資料やらが全て床に落ちていた。

もちろん自室にあった漫画もすべて落ちていた。

夕方になっても停電が続き、母とコンビニを回って夕飯を調達しようと思ったがどこも何も無い。

やっとの事で見つけて家に帰ったら電気がついた。テレビをつけてみるとニュースでは一面震災特番。本当に鳥肌が止まらなかった。

断水も迫っていたから家中の入れ物に水を入れた。学校も休校になって、数日後に自衛隊の人が給水車を走らせてきた。僕は母と弟と一緒に水を貰いに並んだ。小学校の同級生とも会った。

1週間か2週間後、卒業式はちゃんと行われた。そこで久しぶりに友達に会ったが、入場前に水道の水を飲もうとした友達を止めたこともあった。

原発事故で外に出ちゃダメ、放射線水に入っているかもしれないということだったから。

そして卒業式は短く30分もなく終わった。門送は校舎内で行われた。

もちろん中学の入学式も短くなった。被ばく量を図るためのストラップも配布された。甲状腺検査は定期的に行わ

れて今も続いている。
あの日起こったことは全て記憶に残っている。3月11日になると必ず黙祷をする。福島から上京してもずっと行っている。もちろん福島の方を向いて。自分史上最恐の経験をしたんだと回顧。

フランス / France

What I remember is that on the news we got to see a lot of videos taken by people of the tsunami. Then every day we would also have the number of people who were missing and the huge number was scary. It was not a huge coverage but everyone here knew about it.

私が覚えているのは、ニュースで人の手で撮られたたくさんの津波のビデオが放送されたのを見たことです。それから連日、多くの人々が行方不明だとわかり、その膨大な数は恐怖でした。それは大きな報道ではありませんでしたが、フランスの誰もがそれについて知っていました。この話がプロジェクトの一助になることを祈っています。
(日本語訳)

宮城県仙台市宮城野区新田

揺れている間、泣いている人はいたけれど私は初めての経験すぎてもはや怖さ

もなにも感じなかったです。ただ淡々と、泣いている友達をなぐさめながら避難していました。

無事母親に引き取られて帰る時、いつも登下校でつきっていた公園が全部地盤沈下で沈んでいて、ゾッとしたのを覚えています。

そのまま私の記憶は夜になってしまうのですが、まず大前提として、私の地区には津波は来なかったです。むしろ震災の後1回目の新聞を見るまで、同じ宮城県にド黒い、大きな津波があったことも知らなかったんです。

多分両親は津波のことは知っていて、私と当時4歳の弟のことを気にして黙っていたんだと思います。

津波を知らなかった私は、地盤沈下や建物のヒビしか被害のない自分の家から遠い東の空に夜10時ごろ、明るい火(海岸の火事)がずっと見えていることに、地震後1番の恐怖を抱きました。

電気が復活してテレビをつけたら1番がぼぼぼーんのCM、2番目が津波の被害にあって遺体が転がる道を映した映像だったり、蛇口から透明な水が出てくるところしか知らなかったため、水道が復活して蛇口から1番に出てきた水の色が茶色くて悲鳴を上げて

しまったり、あんなに驚いて恐怖で震えたりしたのにほとんどを忘れていて、いろんな人が言っているけれど、時間の流れが怖いというのを実感しました。

宮城県仙台市太白区長町

ほんと着の身着のまま避難してきたって人ばかりで、割とそこでことの重大さを知るみたいなのところはあるかなー。あの時期にしては珍しく雪も降ってたし。俺も母親見た瞬間泣いたな。あの日偶然みたいなこといっぱいあった。その日中にじいちゃんばあちゃんも含めてちゃんと安否確認できて、家にみんな帰れたのはほんと偶然だな。親父は普段東京にいるはずなのに前日たまたまこっち帰ってきてて兄貴も普段あの時間は学校かバンドなのにあの日高校入試で学校休みでしかも一日中ばあちゃん家にいたから俺のこと迎えにきてくれたのも早かった。

この世界のどこか

僕は(掃除の時間中にサボってた罰の)ごみ捨て中で外にいたんだよね。信じられないくらい揺れて、友達と最初はふざけて、揺れてるぜ〜って笑ってたんだけど、(給食とか運ぶような大きい)トラックが跳ねてて、運転手の人在必死にハンドルに掴まっているの見て「やべえな」って、「校庭に行く？」っ

て行ったら、しばらくして続々人が校舎から出てきて。よく見たら校庭ひび割れてるし、大人は携帯(当時はガラケー)のニュースで流れてくる津波の映像とかで言葉失って涙流してて(僕らは見せてもらえなかった)、小5だったけど、これ、本当に大変なことが起きてるんだって思った。雪もめっちゃ降り出してきて激寒いし、かと言って体育館は階段とか壊れてて入れなくて。すごい大変だったの覚えてる。後で話聞いたら、教室の中ではみんな机の下に潜ったらしいけど、机ごと教室の中を前後に揺り動かされたらしくて、本当に怖かったらしい。いかに普段の防犯マニュアルにない未曾有の事態だったかって、怖くなった。

ちなみに地震のあと二日三日くらいで、井戸の水とプロパンガスがある石巻の祖父の家(山に囲まれた地域)にいて過ごしてて(仙台は全部ダメだったので)、3/12とか3/13くらいだったと思うけど、復旧手伝いでじいちゃんの知り合いが働いてた埠頭に行ったのね。その時はまだ水引いてなくて、少しでも低い土地は水が溜まってて、瓦礫も凄かった気がする。これはちょっと定かじゃないけど、匂いも凄かった気がする。今思えば、僕が走った道路のそば、水が溜まった場所に、まだ何百人も亡くなった人、もしかしたら辛うじて生きていた人がいたかもしれないと思

うと、なんとも言えない気持ちになる。ショッキングすぎて、あの時の記憶って、もう9年前なのに凄くスラスラと思い出せる。

ちなみに、あの時ACの広告流れまくってトラウマみたいな感じで、知り合いはあの曲ほんとに聴けないし少しでも口ずさむとすごい剣幕で怒られる。あの時は、当時のイメージではあるんだけど、道が狭くて、家がすごい沢山あって、雰囲気も海沿いの家って感じですよ。あそこは監督さんも凄くいい人だったし、人も優しい人ばかりで大好き（ほかの学校はそんなに印象に残るところ多くない）だったんだ、バスケの試合ない間体育館脇の遊具で遊んだりさせてくれたりして。でも、荒浜も津波すごくて、凄かったのは知ってたけど、行く機会ってあんまないじゃん。で、高校になってから、自転車で行って見たら、もうなんていうか、知ってる場所じゃなくて。あの記憶の中の道路どこ？状態で、家なんて1軒もないし、大型トラックが沢山走ってて、気づいたら小学校ついてた。小学校も（確か）体育館とか遊具とかなくなって、もう言葉を失うってこんな感じなんだな、っていう感じ。こんな、何年も経ったのにあの時のまま時が止まっているなって思った。

ある程度対処する猶予を感じてしまうのは一役買ってるかも。地震の時は、なんも準備できずに、ただただ全て奪われていったというか。

あの頃には完全に戻れないってそうだよな。あんなに海沿いにばんばん家建たないし建てられないし。てかあんなご立派な堤防もあんなイメージ無いもん、これはまあ、昔からあったのか分からないからなんとも言えないけど、少なくともあったイメージはない。やっぱあの日を境に色んなことが不可逆に変わっちゃったからな。

結構大学の教授とかで震災の話したりする人いたりしてさ、ん〜、やっぱ少し違うんだよな。主観と客観ってこんなにも違うのかという。少しずつ消えつつある部分も自覚はしてるけどそれでもしっかり覚えてる事の方が圧倒的に多い。被災地を実際に訪れるのはやっぱり他と違う。もちろん、昔の記憶があるとすごく衝撃あるけど、初めて見た光景があれでも、空気感はある。

宮城県亘理町

私は地震時、小学校にいました。たまたま両親が出張で近くにおらず、私は

家族と合流できずに先生方と共に学校の体育館に避難しました。地震から約1時間後、津波が来ました。先生方が体操で使う大きなマットで扉を押さえてやっと、水の侵入を防ぐという状況でした。逃げるのに時間かかる子供や年配の方は狭いギャラリーに移動して、少しでも高いところにとどまり水が侵入してこないことを祈ることしかできませんでした。その夜は余震も続いていて、一睡もできませんでした。ストレスで夜中に気を失う人もいました。朝になり、ギャラリーの窓から外を眺めて驚きました。周囲は海に囲まれ、体育館は孤立してしまい、安全な高台へ避難する経路も瓦礫によって絶たれてしまったという話を消防団の方に伺いました。2日間まるまる、何も食べられず水も飲むことができませんでした。その後消防隊の方々が必死で瓦礫を撤去して下さり、そこから100人以上いた避難者を1台の軽トラックで7、8人ずつ、高台の安全な避難所へ運ぶことになりました。軽トラックの荷台に揺られながら、自分が育ってきた故郷が、好きだった景色が全て瓦礫の山に変わってしまった様子を見て、涙も言葉も出ませんでした。

福島県南相馬市

当時私は福島の南相馬市に住んでました。震災後、福島第一原発の影響で家が避難区域に。それで、着の身着のまま親族の多い仙台に車で避難しました。そのまま新年度に合わせて仙台の学校に転校しました。通っていたスイミングスクールは、結局市民プールに変わって、思い出のプールはなくなりました。学校のみんなも、選手クラスのメンバーも、地元に残ったり地方に行ったりバラバラ。さよならも言えずに会えないまんまなのが少し辛かったです。自分のこと以外でも、発電所の近くに住んでいる友達は家をも失ったりしているから、心配でした。私は震災のことを風化させたくなくて、小中は復興ボランティア活動に積極的に取り組んでたよ〜。徐々に復旧はしているけど、ふるさとを失った福島の人たちが早く元の地に戻れるように、もちろん沿岸地域の方々も含めて、祈ってます。

宮城県東松島市

2011年3月11日。私は小4で妹が年長。松島基地で働いていた航空自衛官のお父さんはたまたま休暇を取ってた。お母さんはその頃はパートしてなかったと思う。私は元気で、あまり欠席とか早退とかしない人だったけど、その日に限って

体調悪くて、ちょうどその時間は保健室のベッドで寝てた。早退する準備をして、お母さんに迎えに来てもらうように電話してもらった。妹は幼稚園が終わって、帰りの園バスに乗ってた。お父さんとお母さんは家にいた。

地震発生。

私の小学校は1~4年生が2階で、5・6年生が3階。職員室とか保健室が1階にあった。保健室は、普通の教室よりもこまごましたものが多くて、そのひとつひとつが軽いから、揺れた時はがっしょんがっしょんって、すごい音だった。保健室の真ん中にある大きなテーブルの下に潜った。金属トレイの落ちる音とかが甲高くて、本当に音にびっくりした。揺れが収まってから、保健の先生と同じく保健室で休んだ5か6年生の男の子と一緒に、ランドセルを持って校庭に出た。職員室と保健室は直接校庭に出られるところがあつたから、私たち保健室組がいちばん最初に校庭に避難した。そのあと、職員室にいた校長先生教頭先生、他の先生たちが校庭に出てきて、2・3階の窓から校庭を見てた先生と児童に、荷物を持たずに避難するように、電子メガホンを使って呼びかけた。続々と児童たちが先生に率いられて校庭に避難してきて、全員が校庭に集まって点呼を取った頃に、今度は次々と保護者たちが迎えに来た。

お父さんは震度5弱以上で必ず出勤し

なきゃいけないから、車で自宅よりも海側にある基地にすぐに向かった。お母さんが私の迎えにくるはずなんだけど、なかなか来ない。児童の2/3くらいが保護者と帰っていった頃に、お母さんと妹が来た。先に、小学校の近くにあった幼稚園のバス停で妹を迎えにいったらしい。揺れる前にお迎えの電話をしてたから、なかなかお母さんが来なくてかなり怖かった。

近くのコミュニティセンターに停めた車で、お母さんと妹と、海からかなり離れた山側の避難所に行った。道は全然渋滞してなかったけど、もうその時点でお母さんの携帯電話は誰ともつながらなくなっていた。

避難所に着いて部屋に入ってから少しすると、お父さんが来た。聞くと、基地の門の手前までは行けたんだけど、基地の中にいた人に戻ってって言われて急いで引き返して来たらしい。

こんなに大きな地震を経験するのは初めてだったから怖かったし、家に帰れないくらいの津波なのかと思うと恐ろしかったけど、目の前に家族が全員いたから安心はしていたかな。

次の日の朝、お父さんは車で基地に向かったけど、瓦礫と泥のせいで行ける状態ではなく、車を家に置いて自転車で出勤していった。家は線路の目の前にあって、線路よりも山側にあつたんだけど、津波の被害は全くなかった。線路よりも海側は膝ぐらいの高さまで

水が来たらしい。間一髪。間一髪といえ、妹の園バス。もしお母さんが妹よりも先に私を迎えに来てたら、妹はまた幼稚園まで戻るようになってたんだけど、妹を降ろしたあとの園バスが津波に飲み込まれたんだって。運転手さんと先生は民家の屋根に上ることができたから助かったんだけど、もし妹がそのバスに乗ってたらと思うと、本当に恐ろしい。

そのあとお父さんはなかなか帰ってこれなくなって、お母さんと妹と数日間避難所で過ごしてたんだけど、途中から私と妹は迎えに来たお婆と富谷で2日くらい過ごした。でも、やっぱりお母さんと離れているのはつらかったから、お母さんの元に返してもらった。お母さんも私たちと離れたあと声が出なくなったんだって。

お父さんはずっと基地内の清掃とか市民への炊き出しで帰って来れなかった。何かあるときはお母さん1人で家庭を守らないといけないうのはわかってたから、お母さんはお父さんがいない中私たちを不安にさせないようにたくさんがんばってくれた。家族が皆助かったのはたくさん偶然が重なったからなんだな、と何年か経ってから思った。

フィンランド / Finland

I don't remember much to be honest. Like

the tsunami of 2004, the news felt distant and it was difficult to imagine.

The reality only hit me when I went to Tohoku University for exchange studies.

正直なところ、あまり詳しくは覚えていません。2004年の津波のように、3.11の災害は自分からは遠いもののように感じて、その実情を想像するのは難しかったです。私が交換留学生として東北大学に行った時にやっと、その現実を目の当たりにしました。(日本語訳)

東京都練馬区

震災当時、僕は都内の小学校に通う小学6年生でした。卒業式に向けた音楽の授業中、地震が発生しました。「揺れ始めたな」と思った途端、大きな揺れが襲ってきました。防音のために分厚く、鍵がかかっていたはずの扉が開いたり閉じたり、バタバタと揺れていたことをはっきり覚えています。

校庭に避難して、地区班ごとにまとまって多くの人が保護者の迎えを待っていました。僕は両親が共働きで、震災当日は2人も仕事に行っていて家にいませんでした。マンションの隣に住んでいて仲の良い同級生と話している時に、友達の親御さんが迎えに来て、地震の情報を聞きました。友達の親御さんに携帯を借りて親に電話しましたがつながらず。また、津波が起こるかも

しれないという情報もあると聞いて、親の職場が都内でも海に近い方だったので、なおさら不安になりました。

僕はたまたま祖父母が近くに住んでいたの、祖母が迎えに来てくれて、自宅に寄ってから祖父母の家に行きました。そこで見たニュースの映像は、ぼんやりではありますが覚えていて、すごく地震に対して恐怖を感じていました。

夜7時くらいになって父親から電話が入り、「帰れないけど無事」という連絡を受けました。一方で母親とはなかなか連絡がつかず、夜遅くなったので寝るように促されました。「電話来たら起こしてあげる」と祖父から言われ布団に入りました。しかし、余震のたびに戸棚や窓の揺れる音で何度も目が覚め、落ち着けませんでした。

深夜になって母親から連絡が入り、父親と同様に「帰れないけど無事」ということ知り、安心したのか気づけば翌朝でした。

翌朝、起きてから机の上に乗っていた新聞を見て、「昨日の出来事は夢じゃなかったんだな」ということを改めて感じました。

停電になったり、物が足りなくて困ったという体験がなかったのは、本当に恵まれていたなと思います。卒業式も

予定通りに行われたので、大きな問題はなかったと思います。

些細なことですが、毎年行われていた「小学校の野球チームの6年生VS進学予定の中学校の野球部」という試合が無くなりました。

他に影響があったのは、翌年に中学1年生の時に行われる予定だった臨海学校が、津波の不安により中止になったことぐらいです。

物理的な影響は少なかったですが、震災までは地震が起きても「あ、揺れ始めた、早めに揺れ始めに気づいた」くらいにしか思っていないでしたが、震災から1年間くらいは地震のたびに怖がっていました。

東京に住んでいるので、「首都直下型地震」の話を知ったときに、「どうなるんだろうか」という不安を抱えていました。でも今となっては南海トラフの方も危ないって言われて、より一層どこにいても問題はあったらなって感じました。

震災以降、地震のニュースなどに興味というか「知らない」という思いがあり、大学1年生の時は、教養科目として開講されていた地理学が地震についての内容だったので履修しました。一方で、ボランティアなどには行ることがなく、何もしていない状態でした。

そんな大学1年の冬、不思議な縁もあった福島県川内村にボランティアに行きました。何より印象に残っているのは、送られてきた救援物資を仕分けするという作業です。震災直後に送られてきた荷物は倉庫まるまる1個分。ボランティアのメンバー十数人でかなり長い時間をかけてすべの荷物を外に出し、必要なものだけ倉庫に戻すという作業でした。途中で雪が降ってきて、東京にいる僕からしたらかなり寒かったはずですが、終わってみれば違う記憶ばかりが残っています。

それは、必要のないものが7、8割を占めていたということです。被災地に支援物資を送るというのは、遠い地域に住んでいる人からしたら、応援なり、支援したいという気持ちの表れだと思います。ですが、「被災地に必要なもの」ではなく「自分がいないから送れるもの」ばかりが届けられていました。この時、「実際に行って、自分の目で見ないと分からないことがある」ということを痛感させられました。良かれと思って、とにかく物資が必要だろうと思って送ったものは、逆に迷惑になることもあるんだと思い知らされました。

そのボランティア以降、被災地のボランティア関連のことが大学にないかを探している時に、南三陸町に行くプロジェクトを知りました。すぐに参加し

たいと思いましたが、1人で参加することに不安を感じた僕はクラスの友達に声をかけ、二つ返事でいいよと言ってくれた友達と一緒に参加しました。そのボランティアでは、南三陸町では川内村とは違う問題があるんだなということを感じさせられました。ボランティアに参加したことで問題を知った一方で、町の素晴らしさや町の人々の温かさにも触れました。ボランティアから3か月後、一緒に参加してくれた友達と、プロジェクトの中心メンバーだった先輩と3人で南三陸町に行きました。これはボランティアではなく、ただの旅行です。

震災に関して、多くのことをやるのは自分には無理かもしれないと思いますが、せめて南三陸町について、自分が好きだと思った町についてだけは、何かしらの発信をすることや何度も足を運びたいという思いでいます。

神奈川県小田原市

当時、私は小学6年生で、震災当日の朝に病院でインフルエンザの申告を受けていました。私の両親は共働きで、震災直前は一人で高熱にうなされながら和室で休んでいました。地震発生時、遠くのほうでヘリコプターのような音がしているなあとぼんやり思っていたら、突然、経験したことのない大きな

揺れが襲ってきました。神奈川といえどおそらく震度6~5くらい揺れて、家がみしみし鳴っていて、しまい忘れていた雛人形や水槽の水、トイレの置物等ありとあらゆるものが落ちてきて、一人ぼっちの中このまま家が潰れて死んじゃうんじゃないかと、すごく怖かったのを鮮明に覚えています。パジャマ姿だったのに思わず家を飛び出してしまって、後々母に家の中にいたほうが安全だからと注意されたことだけでも忘れません。

震災直後、父が宮城出身だったこともあり、何度も実家に帰っては被災地に赴き写真を撮ってきていました。今回はデータが残っていた4月と8月の写真を提供したいと思います。私自身の記憶が定かではないのですが、私も父に連れられて亶理町や気仙沼に赴き、がれきの山や家がなくなり土台だけが残った更地、ぼっきりとなくなった電柱、打ち上げられた大きな船、塩害でひび割れた田畑等、悲惨な状態を目にしました。

正直当時のことで覚えていることが少ないのですが、上記の2つの記憶だけは忘れられない経験です。神奈川で3.11を経験しましたが、直後に私を被災地に連れて行ってくれた父のおかげで、同じ神奈川県民よりもより貴重な経験をしたと思います。

被災された方々には心よりお見舞い申

し上げます。どこで震災を経験していたとしても、経験した私たちは忘れちゃいけないし忘れられないです。大々的にじゃなくても経験していない世代には自分なりの形で伝えていかなきゃいけないな、と今回この経験を書きながら改めて感じました。今回このプロジェクトを立ち上げてくれて形にしようと頑張っているメンバーの皆さん、ありがとうございます。尊敬します。本当に応援しています。



2011.8.3 亶理町



2011.8.5 亶理町

宮城県仙台市青葉区国見

3.11の時。私は学生で一人暮らしをしていました。卒業式までもうすぐという時、震災にあいました。震災にあった時は、余震も続いていたこともあり、夜も靴を履いて寝たり、怖くて不安でなかなか寝付けなかったことを思い出します。ふと、街中に降りてみようと思って仙台駅の方に足を向けると、たくさんの人で溢れていました。御家族・知人・友人と連絡を取るために携帯やスマホの充電をしに来ている人達。食料を求めている人達。他にも炊き出しをしていたり、声をかけていたり。倒れてしまっぐちゃぐちゃになったお店の中を直していたりする人。たくさんの人で溢れていました。

そして、初対面の方々とお話したり、食糧を分けてもらったり……人の温かい気持ちに触れる体験をしました。今、何が自分に出来るのか、無意識に考えることが出来た。そんな日々でした。私は介護の職場に就職が決まっていたので、被災された施設の方々のケアが私の今のできることでと考え、行っていました。当時を振り返れば、仕事をすることで、不安や恐怖を紛らわしていた部分もあったように思います。支えていたつもりが、支えられてもいたなど感じている今です。とても有難いことです。今、自分が楽しく喜んで出来ることで宮城県内で仕事をしており

ます。これも自分には何が出来るのか。考えるきっかけをくれた出来事であったと感じています。悲しい出来事だった……だけで終わらせたくない。人々の繋がりや温かさ、学ぶことがあったと信じていますし、感じています。

秋田県

あの時は、電車に乗っていました。15歳で高校受験に落ちて、それでも第一志望の高校に行きたかったものですから、高校浪人していました。2年目の入試が終わり、自己採点の結果としては余裕を持って受かっているだろうと。人生で一番浮かれていたころでした。浮かれたノリで、同級生で一番早く高校の勉強をはじめようと、高校の参考書を本屋で買い求め、鼻歌気分で帰りの電車に乗っていた時、あの時を迎えました。

ドンと鈍い音がして、電車が跳ねあがりました。あー脱線事故で死ぬかも。せっかく受験勉強頑張ったのに、結局僕は上手くはいかない人生なんだろうとか色々思う内に、電車は急停止。とりあえず生きていたことに安心しました。

地震が起きたことを知ったのはそれからしばらく経ってからでした。1時間待てど、2時間待てど電車に閉じ込められたまま。結局4時間近く経って、電車は動かないのでみんなで最寄り駅

まで歩きましょうと車掌さんが案内して回られました。

電車のドアは停電で開かない為、使って初めて知りましたが、運転席の前方には手で開く非常口がありまして、そちらから出てハシゴで線路に降り立ちました。

既に時刻は5時を過ぎて、冬の秋田の道はかなり暗く寒いもので、線路が続く単調な道は、いけどもいけども終わりがなく思えました。後々思い返してみると、駅までは2kmもなかったかと思えます。それでもご年配の方々と一緒に歩く道はどこまでも遠く感じました。

駅には母親が車で迎えに来てくれました。家についてからも停電で、津波のことも原発のことも知ったのはそれからずっと後のことでした。

宮城県名取市

震災時小学校に迎えに来てくれたのが兄で、「あれ母は?」と思っていると、母は丁度地震の時、名取エアリ方面に車で出かけていたらしく、津波から逃げるための渋滞にハマっていたらしいんですね。でもこのまま渋滞の中いたら津波にのまれると思った母は一か八か抜け道へ1人曲がったみたいです。それが功を成し、母は夜、無事に帰ってくることができました。渋滞中、道が2つあって、もう一つの方を選んで

いたら、空港の屋上駐車場?か名取エアリの屋上駐車場?に津波から避難しなきゃいけなくなって、何日か帰ってこれなくなってみたいです。

神奈川県横須賀市

●発生時

小学校6年生だった。卒業式の2週間前だったかな。卒業式は通常通り行ったから。算数の授業中だった。校舎は古かったから相当揺れた。グラウンドに避難した後、余震が何度も来た。東北が震源らしいと聞いて、1年前に仙台に転校したクラスメイトのことが心配になって何人かがパニックになり始めた。そしたら担任の先生に怒られた。体育館に移動して、親が来るまで待機していた。たまたまその日は母の仕事が休みだったからそんなに待たずに迎えに来てもらった。いつも通学路で挨拶運動をしているおじさんが「学校に迎えに行つて」と呼びかけて歩いてくれていたらしい。母が中学生の兄を迎えに行こうか考えあぐねているうちに兄は歩いて帰ってきた。地域ごとに集団下校したらしい。電気は全て止まっていた。ガスコンロと水道は使えたからインスタントラーメンを作って食べた。IHじゃなくて助かったね、なんて言いながら。アロマキャンドルしかなかったから、テーブルに置いて毛布にくるまって姉と父が帰ってくるのを

待った。姉は家から電車で1時間以上かかる高校に通っていた。学校の先生が車で送ってくれて、その後友人の親戚の車で帰ってきたらしい。6時間かけて帰ってきた。信号がつかない、車のごった返していたらしい。遠方の生徒は何とか車で送ってもらえたらしく、むしろ近場の生徒は学校に泊まったらしい。東京勤務の父は次の日ようやく帰ってきた。翌日、土曜日の午前に母とスーパーに買い物に出かけた。土曜日だったからか、不安を感じたからか、スーパーは人でごった返していた。昨今の状況と同じだね。誰もが籠城に備えようとしていたのだろうか。買い占め対策で「お一人様1点まで」という表示がけっこうあった気がする。スーパーの従業員さんたちはいつそんな準備をしたのだろうか。流通がストップしていて割としばらく品薄だった気がする。高速道路が通行止めだったらしい。その後数ヶ月、当時は「自粛」が流行みたいになってた。昨今の「ステイホーム」的な。花見自粛しましょうみたいな。町内会の子どもの会の卒業生を送る会も自粛だった。

●計画停電

電力供給が激減したから地域と時間を指定し電力供給を止めようっていう作戦。うちの町内は停電してるけど隣の町内はしてないとか、けっこう穴だらけで「無計画停電」って言われてた。2、

3回うちには計画停電したかな。停電中に外を見ると灯りがついている家が見えて、なんだよって思った。春休み中だった。「計画停電」という言葉だけが使われて、結局きちんと運用出来たんだろうか。電力使用量は減少したんだろうか。

●テレビについて思ったこと

ACジャパンのCMしかしばらくの間やっていなかったのはかなりの人の記憶に残ってると思う。途中で「AC」の音声なくなったのもきつとみんな覚えてるよね。

「頑張ろうニッポン」ってどの特番も言っていた。ある被災者の方のブログの一言が忘れられない。「キレイな服着て、一緒に頑張ろうって言うけどさ、お前らには帰る家あるだろ?」。共感って“一緒に頑張る”ってなんだろうね。

●中学校の話

生徒会執行部が被災地に向けて何かしようっていうキャンペーンを始めた。生徒会執行部の先生が津波でご友人を亡くして、そこで企画が持ち上がったのかな。使っていない文房具とか古着とか集めて送ろうっていう企画が上がったが賛否両論。使い古し送られたら迷惑だろうっていう意見。当時の私は何派だったか覚えてない。わりと生徒会アンチだったかもしれない。ただ、メッセージビデオ送りますって言われ

て、合唱曲練習して、全校集会で歌ったけど動画が音割れ酷すぎて、これ送るのかよ、学校中で反対の声が上がってた。実際に送ったかどうかは定かではない。2019年2月、川内村で支援物資の仕分けを手伝った時、“ありがた迷惑”の意味の一端に触れて、中学の時の話を思い出した。

●いじめの問題

横浜の小学校で起きた、被災地から避難してきた児童に対するいじめ問題。いじめられた子もいじめた子も、当然なんだけど私の知らない人。報道見ただけだから。でも神奈川県で起きたことでなんかすごい恥ずかしかった。そのニュースを見て「福島だから（仕方ない）」って言った大人を見て、啞然とした。こうやって風評被害って生まれて根付いて繁殖するんだって思った。

●原発問題

2017年：浪人時代、某予備校に通っていた時、とあるイベントに参加した。福島で活動するラジオパーソナリティと福島のこどもたちと映画制作をするプロジェクトをやっている人によるパネルディスカッションだった。印象的な出来事があった。ある男の子の発言。新潟出身で、地元には原発がある。福島の原発事故の影響で稼働しておらず、大きな影響を受けた。東京の人達はそうやって遠くの知らない土地に原

発作って何も知らずに毎日使っている。どういう気持ちなんですか、と。誰も何も言えなかった。勇気を出した一人の女の子が、今まで気にしたことなかったけどこれから気にしないとイケないって思った、と発言していた。浪人して上京して、原発事故のことなど過ぎ去った東京を見て、きっと彼はショックだったんだろうな。事故のことを知っていて、被災地のことを思っている、結局東京電力のユーザーなんだよな。自分は、自分自身に何かできる訳ではないけど、その時のやるせなさ、どうすることも出来なかった。

●海外の風評被害

留学生から、日本政府は原発で兵器作ってるんでしょ的なこと言われて、啞然。英語力なさすぎて言い返せなかった。隣にいた別の留学生（理系）が説明してくれて疑問解消したのかな。とにかく悔しかった。被災地に行った経験も、原発について学んだ経験があっても、あの一瞬、たった一人の誤解も解けない私は。

●常磐線開通

2020年3月：JR常磐線が開通して、夜ノ森駅で人々が喜んでる報道を見て、私も喜んでた。一緒に川内村に行った友人を誘って夜ノ森まで行こうかと考えていた。となりで「誰が使うんだ。お金の使いどころ考えないよ。」って言

われた。信じられなかったけど、これが“行ったこと無い人”の発言だと思った。自分がなんと返したかよく覚えていない。「見てから言ったら？」とか言った気がする。

ベトナム / Vietnam

2011, I was just 13 years old. I remember news about the disaster was everywhere. We, Vietnamese, felt sad, sympathy for the people there. We praised and shared thousands of stories of how Japanese behave so politely and unitedly and patiently in the middle of the disaster, like an endless line of people waiting for relief goods without scrambling, like a shop owner catered food and drink free for disaster victims. We all know about those stories, but we just “know”.

2019, for the first time I put a step on that island country. I even chose to come to Tohoku, which had been affected worse by the disaster. I was not scared, even a little. Came there with all my excitement. Sendai welcomes me with the best atmosphere, the best weather, and the best people. The peacefulness still exists, sakura still blooms gorgeously, people still live like their life is full of happiness. I can't say I know Tohoku, or Sendai. But there is one thing I can be sure, there is no threat waiting for you in that land.

I still remember one day, in the twilight, beside the Hirose river, one of my friends told me about his 11/3/2011 story. He said how the earthquake hit his house in Saitama, how his TV crashed on the floor, how the media was full of news about victims and damages in continuous 6 months, how Japan changed forever. Besides that river, it was just a story, but for the first time, everything became so real for me. Like “On this land, where I am standing, 8 years ago, people died, lost their families, lost their homes. On this land, where I am enjoying my longest vacation, “pain” spreads into every single corner. Earthquake rocked and stopped, tsunami swept people and houses and came back to the sea, but the loss and pain is still here, in survivors' hearts and eyes.”

I still remember the day I came to Arahama Elementary School which was flooded by a massive tsunami up to the second floor. Now it has become an earthquake memorial site, where you can see the damaged school building in unchanged form as well as large photos and documentary films showing how it looked at the time. “Shocked” can't describe my feeling when I got there. I just felt like, I just knew that that feeling would haunt me forever. People can share “mystery” stories about

lands which haven't recovered from the disaster, which are still closed and uninhabited after the nuclear explosion. We find those stories so interesting. But they are "pain".

People can worry about animals and plants coming from post-disaster areas and discriminate against products from there. Their worries are reasonable. But if you can spend a few minutes researching and reading, you can understand how hard Japanese people and the government had tried to recover the damage of the disaster, you can know that products from those lands are safe and high-quality like every Japanese thing. Don't discriminate against people there, don't discriminate against products produced by those people. They deserve better. If possible, come there and experience that amazing land by yourself.

I love Sendai.

Not just because of how beautiful it is.

But also because of difficulties it had been through.

2011年、私はまだ13歳でした。震災についてのニュースがいたるところで報道されていたことを覚えています。私たちベトナム人は、悲しみ、そこにいる人々に同情しました。私たちは、被災者が救援物資をきちんと並んで受け取ったり、ボランティアが被災者に

無償で食事を配布するなど、災害の最中でも丁寧に団結して辛抱強く振る舞う日本人についての何千もの物語を賞賛し、共有しました。私たちは皆、それらの話について知っていますが、私たちはただ「知っている」だけです。

2019年、私はその島国に初めて足を踏み入れました。震災の被害が大きかった東北に来ることを選びました。私はほんの少しも怖くありませんでした。ワクワクしながら仙台に来て、仙台も、最高の雰囲気、最高の天気、最高の人々で私を迎えてくれました。安らぎは今も残っており、さくらはまだ華やかに咲き、人々は今も幸せに満ちた生活を送っています。

私は東北や仙台を知っているとは言えません。しかし、私が確信できることが1つあります。それは、その土地であなたを待っているものは脅威ではないということです。

夕暮れの広瀬川で友人の一人が2011年3月11日の話をしてくれた日のことを今でも覚えています。彼は、埼玉の彼の家を地震が襲ったこと、テレビが床に倒れ壊れたこと、震災後6ヶ月も被災者と被害についてのニュースでいっぱいだったこと、あの日で日本がどれほど変わったか話してくれました。

あの日あの河原で彼と話すまではひとつの話だったものが、「8年前、私が今立っているこの土地で人々は亡くなり、家族を失い、家を失った。長い休暇に

楽しんでいるこの土地では、「痛み」が隅々まで広がっていた。地震はおさまり、津波は人々や家を襲って海に戻っていったが、生き残った人々の心と目には失われた痛みがまだ残っている。」というように私にとってリアルなものになりました。

荒浜小学校に行った日のことを今でも覚えています。荒浜小学校は2階まで大津波に襲われました。今は震災遺構になり、被害を受けた校舎がそのままの形で残され、当時の様子を写した大きな写真やドキュメンタリーフィルムも見ることができます。「ショックを受けた」という言葉ではそこに着いたときの私の気持ちを表すことはできませんでした。私はただ、この感情がずっと私を悩ますだろうと知ったような気がしました。

原発事故後も閉鎖され復興も進まず無人である土地についての“ミステリー”な物語を聞くこともありました。それらの話は興味深い点がたくさんあります。しかし、それらは「痛み」です。原発事故の被害を受けた地域で育った動植物を不安に思った人々が、それらを材料に作られた製品を差別することがあります。その心配は合理的です。しかし、数分でも調査書や書籍を読むために費やせば、日本人や日本政府が復興のために懸命に努力したことを理解でき、その土地で育った製品も他の日本製品と同じように安全で高品質で

あることがわかるはずですよ。そこにいる人々や、その土地で生産した製品を差別したりしないでください。それらの製品には良い価値があります。もし可能であれば、そこに来て、その素晴らしい土地を自分で体験してください。仙台が大好きです。それは仙台の美しさだけが理由ではありません。仙台が乗り越えた困難も、私が仙台を大好きな理由です。(日本語訳)

宮城県仙台市

私は震災当時、小学5年生で小学校の4階で被災をしました。当時、児童会で私は黒板書記でちょうど会が始まる場所で黒板に議題を書いていました。地響きらしき音がした後、はじめ小さかった揺れは瞬間に激しい揺れへと変わりました。それ以前にも何度か大きめの余震はあり、嫌な予感はしていましたがいまだかつて経験したことの無い巨大でかつ縦と横が入り混じった奇妙ともいえる揺れは、嫌な想像を掻き立てました。

母は自宅に一人、父はそういえば気仙沼に出張をしていたな。

それを思い出した途端、その嫌な想像が更に膨らみ、気持ちの制御がつかなくなり、地震の揺れが更に激しくなると共に涙の制御もつかなくなり溢れてきました。周りの友達には笑っていたり、

ふざけながら机に隠れている、轟音を立てながら割れていく窓ガラス、崩れ落ちる物の数々。そんな状況すらも非日常に感じ、何がなんだか当時小学生だった私は気持ちの整理すらつきませんでした。

一旦揺れは落ち着き、気持ちも落ち着かせようとした瞬間、先程の揺れとは比にならないくらいの揺れが私たちを再び襲いました。このとき、「ああ、もう終わりだ」とそう感じました。普段行っている避難訓練のような整列なんてしてられずただひたすら階段を下り、校庭を目指しました。教室でふざけ笑っていた友達もそのときにはその異常な状況を察したのか、彼らの表情はさっきとは全く異なるものとなりました。

地震経過から1時間半後、友達のお母さんやお父さんは続々と迎えに来るものの、一向に私の母は迎えに来ません。したくもなかった想像がどんと広がっていきます。「もしかしたら、食器棚の下敷きになっているんじゃないか。」「ガラスに突き刺さって動けなくなってしまっているのではないか。」そういった最悪な事態ばかり考えてしまいます。それから更に30分後、ようやく母が迎えに来てくれました。その時の喜びはいまだに忘れられません。父もその後1時間経って帰ってきました。

抱擁を交わし、家族全員揃って蝋燭を立て仲良く過ごした夜は、昼の惨禍を忘れさせてくれる程でした。

ライフラインはその次の日から全て止まりました。近くの公民館へ水を汲みに行きましたが、食糧が中々手に入りません。近所のコンビニは治安の悪化により荒らされ、商品と呼べるものはそこにはありませんでした。1ヶ月後、やっとついた電気。久々にテレビをつけた時に広がる光景は1ヶ月前に感じた衝撃と同じくらい、いやそれを超える位のもので、当時の私には理解が到底及びませんでした。

韓国

震災当時小学校5年生だった私は、韓国で津波によって建物や車などが流される様子をテレビのニュースで見えました。

学校では被災地への援助のために募金を集めたのでお小遣いを少し箱に入れて送りましたが、その頃はまだ自分が日本の、しかも東北地方で生活することになるとは思えなく、ただ隣の国で起きた他人事だと思っていました。

韓国では今まで重なった日本に対する不信が原因として日本産の農水産物の輸入を制限するべきだという声が高まり、今でも東北地方、特に福島県は、放射能被爆地域であるという認識が韓国では一般的です。たった3年前、自

分の東北大学への入学が決まった時も周りの友達や親戚から心配を受けていました。

しかし、実際仙台で3年間生活し、東北地方のいろんな所を巡ってみた結果、東北地方は実は、故郷の皆が思うほど危険な地域ではないということに気付きました。

むしろ、東北地方の美しい自然環境や景色そして、震災の前後で変わったことを故郷の皆に伝えたい。といった気持ちから震災関連の活動を行っています。

宮城県仙台市太白区

私はその時、教室でタイムカプセルを作っていました。小学2年生で転校してきた私もすっかり学校になじみ、いよいよ卒業というタイミングでした。学級で一人一枚デザインした卒業式までの日めくりカレンダーが毎日、数を刻んでいました。地元の中学校とは別の学校に行くことが決まっていたので、一人違う場所に通うことへの寂しさと期待が入り混じる冬でした。そのタイムカプセルは、当時の担任の先生と同じ「25歳」になったら開けられるというものでした。各自がジャム瓶や飾りを持ち寄り、未来の自分に向けた手紙や折り紙を入れて、時が来たらあけようというものです。私は後ろの方の席で、隣や前の席の子とおしゃべりしな

がら手紙の入ったジャム瓶を飾り付けていました。

和気あいあいとした雰囲気のある教室が一変したのはその時でした。いわゆる「地震慣れ」していた私たちは最初はさほど気にしていませんでしたが、すぐにいつもと違うということに気がつき一斉に机の下に隠れました。近くに座っていた体の大きな男の子は、机の下に入りきらず頭だけは守っていました。普段経験する小刻みな揺れとは違い、長く、大きかった。教室ごと揺さぶられている感じ。ガシャガシャとものが落ちる音とともに、教室の蛍光灯が点滅し始めた時、恐怖を覚えました。蛍光灯が消えかかる中、ふと顔をあげた時に見えた担任の若い女性の先生のこわばった表情も、書きながら思い出しました。電気はある瞬間を境に完全に消えました。

どれも断片的で、実際それがどれくらい長かったのかはどうしても思い出せません。

揺れが収まった後、荷物を全て置いたまま校庭に避難するよう指示が出されました。教室からランドセルを持っていこうとした男の子を注意した記憶があります。激しく泣いている子もいれば、まだ笑っている子もいました。自分がどうだったかはよく覚えていませんが、同じ学校に在籍していた弟のことは心配でした。

校庭には長町の職場から母親が迎えに

きました。液状化の被害が大きかった長町では母の職場も例外ではなく、激しい揺れが襲ったといいます。揺れによって勤務先の建物の窓ガラスが割れたようで、その破片が体に刺さった傷がついていました。父はなかなか帰ってきませんでした。当然電話も繋がらなかった。確か、後から知った話ではTwitterだと連絡つくのが早かったらしい。でも当時はガラケーだから今ほど普及していなかった。どれくらい遅かったかは覚えていませんが真っ暗になってしばらくした後、父は仙台市中心部の方にある職場から数時間かけて歩いて帰ってきました。新幹線が止まったために帰れなくなった、福島が自宅の社員の方も私の家に泊まりました。水、電気、ガスは全て止まりましたがガスバーナーが家にあったのでそれを使って食事をとることができました。外の明るさだけが頼りの電気のつかないコンビニ店内では、礼儀正しく皆一列に並んで、「一人何点まで」も守っていましたね。優しい空間だったと思います。その後、近所の公園が瓦礫置場になりアスベストが発生しているなんていう話もされるようになりました。原発の放射能の話もあり、何が正しい情報なのか全くわからない中、外に行くときは必ずマスクをしていました。数日後、私は北海道の祖父母宅へ家族で避難しました。青森までは、バスと鈍行列車

で乗り継いで行きました。1ヶ月離れていたためガスの復旧などには立ち会っていません。卒業式にはいけませんでしたが、話によると規模縮小で行われたようです。練習していた6年生からの言葉などはなかったと聞きました。宮城に戻ってきてからは地盤の強い別の町に引っ越したため、あの日以来会っていない友人はたくさんいます。2年後、タイムカプセルの瓶を開けて小学校最後の授業を思い出す時、必ずあの日の揺れや暗さもともに思い出されるのだと思います。私は、幸いにも大切な人を失う経験はこの震災でありませんでした。私の体験は他の誰かにとって慰めにも救いにもならないと思います。こういう記述が読んだ人を傷つけてしまうのではないかという恐怖もあります。今回、自分が書くことで初めて思い出したことがたくさんありました。自分は大きな被害に遭っていないから語ってはいけないと思い出すこと自体やめてしまっていたことに気づきました。5つ離れた私の弟は当時小学1年生でしたが、はっきりとした記憶はないようです。そこから10年も経っているのですから、おそらくこの体験談の多くの書き手である現在20代の人々が記憶を語れる最後の年代なのではないかと思います。その人たちが震災と向き合うことで、これから東北の町が立て直されていくと信じたいです。

東北を「知る、行く、感じる」

- 女川、陸前高田、石巻を訪れて -

地震や津波の被害、当時の記憶、そして今の沿岸地域について見たこと、聞いたこと、感じたこと。4名の学生たちが、それぞれの経験や思いを形にしようと寄せてくれた記事をご紹介します。

※掲載している情報は、執筆当時のものです。

#1

女川観光で疲れたらココ！ OCHACCOでオナガワスカッシュを！

写真・文：粥川颯人（2020年9月30日投稿）



皆さんこんにちは。勝手に女川観光大使の粥川です。

このコーナーは女川のホヤのうまさや安さに感動した粥川が勝手に女川をPRし、ひいては皆さんに女川を訪れてもらおうではないかというコーナーであります。

記念すべき第一回は日本茶フレーバーティー専門店、OCHACCO! 震災後、これまで4回ほど女川を訪れていますが、4回目の訪問で「なにここ〜！素敵〜！」という感じでふらっと入ったお店です。

※「4回しか行ってないくせに観光大使を名乗るな！辞職しろ！」というご意見の方、わたくしも同感であります。が、4回で大

使をやりたくなるほど女川が素敵な町なのです！

中に入るとオリジナルの様々なフレーバーティーが陳列されており、内装はネイビーと白で統一され超オシャレ。※1

時間があつたので僕も店内で“おちゃっこ”しました。注文は「港町のレモンティー」と「オナガワスカッシュ」。注文をすると、店員さんが店の奥でフレーバーティーを入れてくれます。もしかすると、少し時間がかかるかもしれません。というのも、綺麗な色を出すためには水出しにする必要があるそうなのです。実はこの綺麗な色を出すというのが意外と難しい！

左が港町のレモンティーで右がオナガワスカッシュです。※2

港町のレモンティーはアールグレイレモンティーがベース。後から緑茶の香りが追ってきます。このレモンティーの不思議なところは何といても色。この青色は花とお茶の色で、着色料ゼロです。しかも、液性によって色が変わるのでレモンティーを混ぜると赤紫色に変わります！（写真は少し混ぜてしまったので出てきたときはもっときれいな青色でした）

さて、オナガワスカッシュの方はほうじ茶とアッサムティーをソーダで割ったものです。お茶だけでなくシロップかなにかも入っているので、本当に「スカッシュ」です。ちなみに「ロンドンで生まれた、四方を壁に囲まれたコートと小さいゴムの球を用いて行う屋内球技」の様だ、ということではないです。オナガワスカッシュは色は変わりませんが、ほうじ茶の後味がとてもおいしかったです。

おみやげにベリー系の香りのする青いお茶、MONO BLEUとオリジナルサコッシュを購入しました。オリジナルサコッシュは大きさもデザインもちょうどいいのでヘビーユースしております。

MONO BLEUは甘酸っぱい紅茶に近いお茶かと思っていましたが、後味は緑茶。レモン汁などを入れると綺麗な青色が赤紫色に一瞬で変化します。やっぱりフレーバーティーって奥が深いですね……。

OCHACCOはオンラインストアも開設しているため、コロナで女川に行きたくても行けない……という方もご自宅でOCHACCOの



※1 店内の様子



※2 左：港町のレモンティー、右：オナガワスカッシュ

フレーバーティーを楽しむことができます。

ちなみに港町のレモンティーやオナガワスカッシュといったオリジナルブレンドティーは店頭でしか飲めません。ということで、みんな女川へ行こう！

日本茶フレーバーティー専門店 OCHACCO (オチャッコ)
宮城県牡鹿郡女川町女川浜字大原 1-4 シーバルビア女川 A-6
<https://ochacco.jp/>

#2

素敵な女川のホテル！

みんな、エルファロへ行こう！

写真・文：粥川 颯人（2020年10月4日投稿）



皆さんこんにちは。勝手に女川観光大使の粥川です。

今回ご紹介するのは女川駅脇に立地する「ホテル・エルファロ」です！エルファロは女川で宿泊業を営んでいた「奈々美や旅館」、「星光館」、「にこにこ荘」、「かのまたや旅館」の四社が集まってできた会社です。国産のトレーラーハウスをホテルとして活用しています。

ちなみに、「El Faro」とはスペイン語で「灯台」の意味。「津波で灰色の世界になってしまった故郷をパステルカラーのトレーラーハウ

スで彩り、活気を取り戻したい」「灯台のように被災地を明るく照らし続けたい」という思いが込められているそうです。

さて、いきなりですが、エルファロ設立の背景にはとてもとても熱いストーリーがあります。

女川は2011年3月11日の東日本大震災の津波により壊滅的な被害を受けました。前述の「奈々美や旅館」、「星光館」、「にこにこ荘」、「かのまたや旅館」も被災事業者。そのため、震災後しばらくは宿泊施設がな

かったのです……。

その後、被災地の復旧・復興のために、全国から多くの方が被災地に集まって来てくださっていました。各地から来てくださった方々には宿泊施設が不可欠。しかし、多くの場所で「海拔〇メートル以上ではかさ上げ工事が義務」といった具合に建築制限が敷かれていたため、復旧・復興に不可欠な宿泊施設の建設が進まないというジレンマが発生します。

この問題を乗り越えるため、女川町の行政・民間・産業・議会がそれぞれの枠を超え、一丸となって知恵を絞りました。その結果、「建築・建設を伴わない国産トレーラーハウスを活用すれば宿泊事業の早期再開が見込める」という答えにたどり着いたのです。その後、震災からわずか1年9ヶ月というスピードでホテル・エルファロが女川町清水地区に設置されました。女川で宿泊業を行うためには石巻保健所や石巻東部土木事務所からの認可が必要となりますが、保健所や土木事務所の柔軟な理解があったこともエルファロのスピード開業の一因です。つまり、エルファロ設立は、被災地のいち早い復旧・復興というひとつの目標に向けて、行政や民間が協力して実現したものでした。

（エルファロの設立の一連の流れは、ハーバードビジネススクールの教材にもピックアップされたことがあるそうです。いかに類を見ないすばらしい取り組みだったかがよくわかりますよね!）

さて、エルファロ開設の効果もあり、女川はそこから目覚ましい復興を進めていくこ



※1

ととなります。2017年夏、清水地区のかさ上げ工事に伴い、ホテル・エルファロはJR女川駅西側に移転してリニューアルオープン。そして、現在に至ります。

それまでは復旧・復興のために訪れた人々が宿泊する場でしたが、「今後は観光客も増えてくるだろう!」ということを見据えて新しい立地を選んだようです。

この移転のお話ですが、ここにエルファロ押しポイントが一つあります。それが、移転の際にトレーラーハウスが丸々移動したということです。約3か月の期間をかけて、清水町から女川駅まで1.5kmを、約40台のトレーラーハウスが移動したのです……。かっこよすぎる……。

宿泊した際にトレーラーハウスの下側を覗いてみましたが、とても移動できそうにはないくらいにガッチリ固定されていました。でもそれが動くということを考えると、やっぱりロマンですね。

エルファロの敷地全体にはピンク、イエロー、ブルー、グリーン、ホワイトなど、



※2

カラフルなパステルカラーのトレーラーハウスが建っています。各々が宿泊施設で、基本的にトレーラーハウス一棟につき二つの客室が入っています。満足しちゃって僕もこの表情です。*1ちなみに僕が泊まったのはブルーのトレーラーハウスでした。部屋番号の書いてあるタイルも、ルームキーのキーホルダーもかわいかったです。女川駅前からまっすぐに伸びる商業施設、シーバルピア女川を散歩してみると、タイルもキーホルダーも「あそこで作られたやつだ!」と気づくはず。“女川のもの”を何気なく使っているのがいいですね。ぜひ女川を探検して、作っているお店を探してみてください!

気になるお部屋の中はこんな感じ! *2ふかふかのシングルベッドが二台にテレビ、ソファ、冷蔵庫、タオルなど必要なものはしっかり揃っています。念願のエルファロ

に泊まれるということでテンションがぶちあがってしまい、「写真を撮る」という行為をすっかり忘れ、整えられた布団を荒らすゲームをしてしまったので部屋全体の写真を撮ることはできませんでした。猛省。他にも、ユニットバスなど撮ったほうがよかったのかもしれませんが、こちらでも完璧に撮影を忘れていました。ごめんなさい。アメニティは受付を済ませた後に、管理棟の中に置いてあるものを必要なだけ取っていくスタイルです。なんと、入浴剤もあります!

トレーラーハウスなので少し狭いように感じますが、よくよく考えたら縦に長いだけでスペース的には普通のホテルよりも少し広いくらいかも。秘密基地感があってとてもよかったです。今回は「スタンダードルーム」を予約しましたが、「ロフト付きルーム」もあるので秘密基地感をより味わうならこっちの方がいいかもしれません!

エルファロにはいくつかの宿泊プランがありますが、僕が選んだのは「ゆぼぼ温泉プラン」×「おながわ朝食プラン」。「ゆぼぼ温泉プラン」は通常大人500円の入浴料が、事前にエルファロから申し込むと100円引きになるというプラン。「女川温泉ゆぼぼ」に関してはまた記事を書きたいと思っていますが、入ると幸せな気分になれる女川駅に併設する温泉です。JR女川駅の西側にある黒森山が源泉なので、入ると女川パワーを感じられるかも!? テルマエロマエで阿部寛が気絶しそうなくらい素敵な温泉なのでこちらも是非! 「おながわ朝食プラン」はあら汁や焼き魚などの朝食付きプランです。朝食のお魚は

女川のハマテラスにある「お魚いちばおかせい」から仕入れているようですよ! 出てくるお魚が大きいし旨いしでギョギョギョッ! という感じです。ご飯とあら汁はセルフサービスになっていますが、意外とボリュームがあるので特に女性の方はご飯の分けすぎにご注意を!

他にも、BBQや焚火などのエルファロ内でのアクティビティや、ダイビングやクルージング、東日本大震災の「語り部ガイド」といった女川ならではのアクティビティなどもあるためエルファロは女川を満喫するための“基地”として活躍しそうです。また、宿泊プランも「ゆぼぼ温泉プラン」「おながわ朝食プラン」だけでなく、素泊まりできる「スタンダードプラン」やバイカー・サイクリストのための「バイカープラン」「サイクリストプラン」などもあります。潮風を受けてリアス海岸の地形を脚で感じながらチャリ漕いで、女川についたら海鮮丼やホヤを食べてガル屋でクラフトビール。最後にエルファロでぐっすり就寝……クー~~~~ッ! 想像しただけで堪らねえぜッ! 次回は絶対このルートで行きたいと思います。

ということで、サイクリストもバイカーも、ドライバーも電車で来た人も、みんな女川へ行こう! エルファロに泊まって女川にどっぷり浸かろう!

ホテル・エルファロ
宮城県牡鹿郡女川町女川2丁目1-2
<https://hotel-elfaro.com/>

震災遺構・旧女川交番ってどんなところ？

写真・文：粥川颯人（2020年10月17日投稿）



皆さんこんにちは。勝手に女川観光大使の粥川です。

今回ご紹介するのは、「旧女川交番」。2011年の東日本大震災で倒壊し、現在は震災遺構として保存されています。

当時、旧女川交番には二名の警察官が勤務していました。大津波警報が発令されたのち、二人はパトカーで避難を呼びかけ、逃げ遅れた町民をパトカーに乗せながら、高台を目指しました。そのため、旧女川交番での直接的な犠牲者は出ていないとのこと。

女川町を襲った津波は最大で14.8m（港湾空港技術研究所）にもなり、この津波の引き波により、交番は元の位置で横倒しになりました。鉄筋コンクリートの建物が津

波によって倒壊したのは日本で初めての事例。女川町では同じく津波によって横倒しになった「江島共済会館」と「女川サプリメント」も震災遺構として保存候補になりましたが、現在は解体されています。

旧女川交番の保存は女川中学校の生徒たちから、

「津波の被害の重大さを伝えるためにも、津波の威力で倒れてしまった建物を残してほしい。」

「1000年後の人たちが同じ悲しみにあわないように、あの時あったことを伝えていくために遺してほしい。」

「個人として見たくない気持ちもあるが、それでも将来のために遺すべき。」



との声が上がリ、保存の流れを推し進めることになりました。

女川の復興では、「還暦以上は口出さず」という方針があります。女川で生きる時間がより長い、中学生の意見も尊重できるというのはとても大人な対応であり、今後100年を見据えたまちづくりとして素晴らしいものですね。

現在、補修工事などは行われず、2011年に津波で被害を受けたありのままの姿を、震災から10年後の僕たちに伝えています。

津波によって引き抜かれたコンクリートの杭、折れ曲がった梯子、10年間、壁からつり下がったままの黒電話。

復興が凄まじいスピードで進み、震災の傷が見えなくなっていく女川の中で、旧女川交番は「この町が10年前に壊滅状態になるほど被害を受けた」という事実を確認できる場所です。

女川丼を食べることのできるハマテラスから道路を挟んですぐ向かいにある旧女川交番。女川の町全体はかさ上げされましたが、旧女川交番はかさ上げ前の土地に立ってい

るため、近くまで来てみないとその存在に気づきません。ハマテラスを訪れたときには、少しだけ歩いてここにも足を運びましょう。写真には写らない、津波の威力が感じられるはず。

「女川は流されたのではない。新しい女川に生まれ変わるんだ。」

これは震災の年の春に、女川の小学六年生がつくった詩です。この詩は町の復興のローガンとなり、現在も女川町地域医療センターに横断幕が掲げられています。

新しい女川を自分の目で見てほしい。現地の今を知ってほしい。そして、学んだことを周りの人に伝えてほしい。

この連載で伝えることのできる女川の良さは本当にごく一部です。僕が気づくことができなかつた女川の良さもいっぱいあるはず。そういうわけで、僕は皆さんに実際に現地に行ってほしいわけです。

ということで、みんな女川へ行こう！見て、知って、伝えよう！

陸前高田にあばっせ！

写真・文：吉池奏乃（2021年9月21日投稿）



私は大学進学するまで、神奈川県海沿いの町で海を身近に感じながら育ちました。砂浜の綺麗な石を夢中で拾ったり、地引網漁に参加して獲れたてのしらすの味が驚いたり、夏の晴れた日の砂浜で足の裏を火傷しそうになったり……。どれも海で過ごした懐かしい思い出の数々です。帰省した折には、海のそばで少しねばつく潮風を感じて「ああ、帰って来たな」と思うくらい、私にとって海と故郷は切り離せないものです。東日本大震災に遭ったのも海から近い小学校に通っていた頃でした。校外学習の帰り道、もうすぐ学校というところで突然、地面がぐら、ぐら、と揺れ始めました。それまで経験したことがなかった大きな振幅

の揺れが何なのか理解できず、やけに冷静に「アスファルトの上なのに船に乗っているみたいだな」と思ったことを覚えています。神奈川県でもそれほど大きな揺れだったので、もっと大きな揺れや大津波を経験した方はどんなに恐ろしかったことでしょう。実際にメディアで報道される被害の様子は甚大すぎて、現実だと思えませんでした。私には東北に住んでいる親戚や知人がおらず、新聞やテレビで見聞きすることでしか被災地の様子を知ることができませんでしたが、映し出される大変な状況が実際に起こっていることだとイメージするには、それらはあまりに私自身の生活とかけ離れていました。当時、義援金のための少

額の募金をしたり、復興のメッセージを含めた曲を合唱したりしましたが、今振り返ればただ世の中の風潮に促されて取り組んでいただけで、被災された方のために何かしたいと心から思っていたわけではないと思います。

そんな私が初めて陸前高田を訪れたのは仙台にある大学に入学したばかりの2019年4月でした。自然災害のことを学びたいと思っていたので、「東北に来たならば東日本大震災の被災地を訪れたい」という興味から、陸前高田で震災直後からボランティア活動を行っていたサークルの活動に参加しました。ここで簡単に説明させると、陸前高田市は岩手県沿岸の最南部に位置しており、海・山・川といった自然がもたらす恵みが豊富な町です。特に7万本もの松と美しい砂浜を持つ高田松原は全国でも有数の景勝地で、海水浴場としても有名で岩手の湘南と呼ばれていました。先述の通り私は海の近くで生まれ育ったのですが、実は湘南、しかも海水浴場発祥の地（らしい）の出身なので、勝手に親近感を抱いています！

さて、いよいよ陸前高田に向かう道中、私は漠然と「8年も経っているのだから震災前と同じように賑やかな暮らしがある程度戻っているのだろう」と考えていました。しかし、乗っていた車が市内に入って車窓から見たのは、想像していた姿には程遠い町でした。震災後、津波で浸水した地域は元の土地の高さから最大10メートル以上嵩上げされ、その上に一から新しい

町を作る大規模な工事が進められ、この時は土地の造成が終わりに差し掛かった頃です。ぼつぼつとお店があるけれど住宅はほとんど無く、まっさらな土地に電信柱がずっと並んでいるのが見えて、10年近くかかっても人々が元の暮らしを取り戻すことができないくらい震災の被害が大きかったのだと衝撃を受けました。印象的だったのが震災前の街の動画です。実家を出たばかりの私には画面の中の町並みが故郷に似ているような気がして、もしも故郷の町が津波に襲われたらどうしようと思った時に初めて、震災を他人事だと思っていたことに気づかされました。

実際、私が大きな被害に遭わなかったのは偶然に過ぎないのかもしれませんが。というのも、私が通っていた海のそばの小学校では、震災当時そこから高い所への避難は行われませんでした。もっとも、海に近いとはいえ海拔はそれなりに高く、揺れも大きくなかったのも、より高い所に避難する必要はなかったかもしれません。しかし、かつて日本ではあまり大きくない揺れの後に大津波が何度も起こっています。もしも同じ揺れの後に実際よりも大きな津波が起きていたら、私は命を守ることができたのでしょうか。幼い頃から親しんできた海が突如として自然の猛威を振るうことを認識していなければならないと思います。

私は陸前高田を訪れたことで、自然災害で大切な人や物を失う人がいなくなるようにできないか、災害に関する正しい知識を広めることが必要だ、と防災に興味を持つよ



2019年4月

うになりました。陸前高田にはこのように訪れる人に影響を与えてしまう何かがあるのでしょうか。今までこの町のために何かしたいというたくさんの人たちに出会いました。住民の方々が震災で負った心の傷のケアをしたい、地元の観光資源を引き出して町おこしをしようなど、きっかけや対象は様々でも、町を良くしたいという思いを持った人々がいて、それを寛容に受け入れている人々がいて。そうした関わり合いが、この町を一層魅力的にしていると感じます。一度自然災害に見舞われた所を全く同じように甦らせることはできません。陸前高田の美しい高田松原も、元通りにするには何十年、何百年という長い時間がかかります。しかし、たくさんの人々がゆっくりと情熱を傾け続けていくことで、新しいより良い町になっていくのではないのでしょうか。私はこの町がどのように変わっていくのか知りたくて、出来るだけ関わりを持ち続けていきたいと思っています。ところで、タイトルの「あばっせ」は地元の方言

で「一緒に行こうよ」という意味です。一度訪れてみると、もしかしたらあなたも陸前高田に惹きつけられてしまうかもしれません。もしそうなったら、一緒にこの町の変化を見届けませんか。

千葉の大学生 石巻で過ごした1週間の記録

写真・文：らんぼ（2021年4月20日投稿）



2018年3月、当時大学1年生の私はひとりで石巻を訪れました。

生粋の千葉県民で、千葉の実家から出たこともなく、東北に縁もゆかりもない——そんな私に、石巻で過ごした1週間は大きな爪痕を残しました。

東日本大震災から10年を迎えた今、当時感じたこと、そして今思うことを記録に残そうと思います。「何もできない」私が、誰かの心に何かを残せることを願って。

2018年3月 —19歳の私、石巻に行く—

なぜ石巻に？

「なぜ石巻に行ったの？」—何度もこの質問を投げかけられました。

理由は単純、「何かしたい」と思っていたからです。東日本大震災が起きたのは私が小学校6年生の時。震災後、私は、テレビで東北の復興支援をしている多くのポラン

ティアの様子を見て、私も「何かしたい」と思いつつも、行動に移せないままいつの間にか大学生になっていました。

この「何かしたい」という思いをどうにかするために、東北に足を運ぶことにしたのです。大学生活にも慣れ、色々なことを考える余裕が出てきた1年生の秋ごろ、次の春休みに東北に行こうと決意しました。

東北に行きたいと思い始めたのはテレビでボランティアの姿を見たのがきっかけだったものの、当時の私は自分がボランティアをすることには疑問を持ち始めていました。もちろん、ボランティアの協力が必要なことも理解しています。でも、震災と東北のことを何も知らない自分が、ボランティアとして「何かをしてあげる」ということに違和感を抱いたんです。私はたまたま震災の被害を受けなかっただけだし、“被災者”と呼ばれる方々はたまたま住んでいる場所が大きな被害を受けただけ。その間に優劣なんてないはずなのに、ボランティアになるだけで上下関係ができてしまうよ

うな気がして、心に引っかかるものがありました。

そんな思いを持ちながら色々調べていたところ、「イマ、ココ プロジェクト。」(2019年9月末に終了)に出会いました。石巻市内の漁師さんの家庭に住み込み、仕事を手伝える、「漁村留学」をするプログラムです。「これに参加すれば、現地の方々と対等な関係で関わるができるのではないかな。」そう思った私は、迷わず応募し、1週間の石巻行きが決まったのでした。

石巻市雄勝町

私が1週間滞在したのは石巻市雄勝町。石巻市の東部に位置し、海に面した町です。受け入れ先は参加したプログラムの主催団体の方が決めてくださり、雄勝町にご縁を頂きました。私は正直、この時まで雄勝町という地名は全く知らなかったのですが、だからこそこのプログラムに参加した価値があったと思っています。

受け入れてくださったご家族は、漁業と民宿を営むご夫婦(以下、お母さん・お父さん)とそのお母さん(以下、おばあちゃん)の3人家族でした。山の上に自宅兼民宿があり、山の下の海に面した場所に作業をする納屋があります。朝4:30には起床し、山を下りて納屋に向かい、食事・仕事は納屋で行います。1日の作業と夕飯まで終え、また山を登って自宅に戻る、というのが、毎日の生活リズムでした。



石巻日記

1. 方言と戦う

私が石巻で苦労したこと、それは「方言」でした。イントネーションが異なったり、そもそも単語が違ったり……お母さんに「〇〇やって!」と言われても、何を指示されているのかよくわからない。手伝いに来た近所の漁師さんたちとお菓子を囲んでおしゃべりしているときも、話に全く入れませんでした(笑)。

その中で、印象に残った方言が、「〇〇っこ」という言い方。お茶はお茶っこ、はさみははさみっこ、洗濯ばさみはばちんこ(これはお母さん独自の可能性大)。けっこう何にでも「っこ」をつけていた気がします。おやつ時間は「お茶っこの時間」と呼んでいて、かわいいな～って思っただけで、気に入っていませんでした。

あと、漁師さんたちは方言が強だけでなく、声がとても大きかった!お母さんは声が大きいことで、怒っているかのような印象を与えてしまうとても気にしてしま

た。では、なんで声が大きくなるのか?お母さんに聞いてみたところ、「海で身を守るため」だそう。海で働く漁師さんは常に死と隣り合わせ。波音や船の音で声をかき消されることなく、コミュニケーションをしっかりとるために、声が大きくなるそうです。これを聞くだけで、印象が大きく変わった気がします。

2. おいしいメバルに感動

突然ですが、私は魚と肉なら肉派です。魚ももちろんおいしいけど、やっぱり肉の方がおいしいなと思ってしま。石巻に行ったらずっと魚だろうなと想像して、お肉食べたくならないかな……とどうでもいい心配をしていました。

石巻に行ったら案の定ずっと魚介類が食卓に並び、肉を食べたのは1週間で1回だけだったような気がします。でも、心配とは裏腹、石巻の魚介類がおいしくて、まったくお肉が恋しくならなかったんです。



とれたたのメバル!

中でも驚いたのがメバルという魚。2日目の夜ご飯に出てきたメバルの煮付けが絶品で、忘れられません。味付けは本当に、言ってしまうほどどこにでもあるような魚の煮付けだったのですが、身がふわふわで味が染みて、驚くほどおいしかったんです。

また、これは漁師さんの食べ方だそうですが、全部身を食べ終え、骨と頭のみになったお皿にお湯を注いで飲むんです。これがまたおいしい!骨から出汁が出て、煮付けの味付けとも合わさっておいしいスープになります。思い出してまた食べたくなってきた……!

3. 海産物の本当の姿を知る

私が手伝っていたメインの仕事はわかめの茎取り。わかめがたくさん取れる時期だったので、出荷のために、わかめの葉と茎を分けたり、袋に詰めたりする作業を手伝っていました。

機械などは使わず、手作業で全工程を行うのですが、そんな経験をしたことがない私にとっては、技を身につけるのに時間がかかりました。わかめの葉と茎を分けるって、言葉にすると簡単なんですけどね。お母さんに、「小学生の孫よりも下手だよ～」なんて言われたりもしました(笑)。

その時気付いたことは、私の中では“わかめ=乾燥わかめ”だったこと。わかめって味噌汁に入ったり、和え物に入ったり、日常に溶け込んだ食べ物ですが、私がイメージするわかめってどうしてもシワシワでバリバリになった乾燥わかめでした。でも、石巻で生のわかめに触れて、とれたたのわかめを食べて、当たり前なんですけど、「本当に植物なんだな～」という感じがし

ました。身近な食べ物のことをいかに知らないか、思い知らされましたね。個人的に本当の姿に驚いたのはめかぶ。めかぶが生息しているところなんて想像したことなかったのですが、なかなか驚きました。気になる人、ぜひ検索してみてください！



この日は岩海苔も採れました。薄く広げて、スーパーでよく見る海苔の形に仕上げます！

4. 民宿にお客さんが来る

お母さんたちの家族は、自宅で民宿を営んでいます。4日目の夜、民宿にお客さんがいらっしゃいました。お客さんはとある会社の社員さん3人で、その中の1人でその部署の部長を務めている方が、一度この民宿に泊まる機会があり、惚れ込んだんだとか。私は、3人の布団を用意したり、食事の準備をするお母さんの手伝いをしたりしました。そして、ラッキーなことに民宿のご飯をご馳走していただけることになったんです……！てんぶらやお刺身、生わかめのしゃぶしゃぶ、お父さんが今日採ってきたばかりの生ウニなどなど豪華なラインナップ！わかめは肉厚で、しゃぶしゃぶの出汁に通すときれいな緑色に変化するんです。ウニはテレビ番組でリポーターの方が

「甘い！」とコメントされているのをよく見ていましたが、とれたてのウニを食べて、私も「甘い！！」って言ってしまいました。ぜひ一度食べてみてほしい味です。食べ物の話ばかりになってしまいました。おいしいものに囲まれて、本当に幸せな気持ちでした♡



民宿のご飯を準備中。豪華！！

5. お母さんに体力で負ける

お母さんは、家の前や近所の空いた土地に花を植えたり、野菜を植えたりして有効活用していました。その手伝いで、自分の体力の無さを思い知らされることになったのです……。

お母さんの家は山の上にあります。花や野菜を育てていたスペースももちろん山の中にあります。それもあって、どこも急斜面。普段歩くことのないような急斜面をバランスを取ってすいすいと歩いていくお母さんの後ろで、私は何度も滑ったり転んだりして、何とか追いついていました（追いつけてない）。歩くのも大変なのに、ここで作業なんてできるのか？と正直思っていました。お母さんに喝を入れられながらなんとか乗り切りました。



このガードレールの奥は背の高い草がたくさん生えていたそうですが、海が見えるようにお母さんが1人で刈って整備したんだとか！ここにきれいな花を植える計画です。

体力・バランス感覚など、色々な面でお母さんに完敗。親子以上の年齢差なんて信じられない……。毎日の漁師としての仕事も体力勝負なうえに、この作業も日常に行っているなんてびっくりです。私はこの日、いつもよりぐっすり眠れました（笑）

6. 忘れられない海

1日のほとんどを過ごした納屋は海に面していて、納屋と海の間には遮るものは全くありません。実はこの場所、お母さんたち家族の家があった場所。震災の日、津波で全て流されてしまったそうです。お母さんは震災の話をお母さんにし

せんでした。でも、唯一「（津波で家が流されてしまい）急に今までの思い出も全部なくなっちゃって、悲しかったよ。」とだけ話してくれたのが強く記憶に残っています。

私が滞した地域は山奥で人口も少なく、大きな被害を受けたにも関わらず、あまりボランティアなどの支援が行き届かなかったそうです。今はもう被害の痕跡も見えないほどに復興を遂げていますが、そこまでたどり着くには住民の方々の地道な作業があったそう。メディアなどを通して見ていた「被災地」は、ほんの一部でしかないのだということも、改めて感じさせられました。

納屋から見る海は、多くの人の大事なものを奪っていった海は、皮肉なことにとても美しかったです。その海を思い出すと、その美しさに感動した気持ちと同時に、様々な感情がぐちゃぐちゃになってこみ上げてきます。そして、それでも海に向き合い続けるお母さん、お父さん、おばあちゃんの背中からは、強い覚悟を感じ、身が引き締まる思いでした。



納屋から見た明け方の海。

2021年3月 —22歳の私が今思うこと—

「被災地」「被災者」という言葉への疑問

私が石巻での1週間を通して一番変わったのは、「被災地」「被災者」という言葉への感じ方。震災の話題が出る時、これらの言葉をよく聞きます。

もちろん、便宜上その言葉を使って表現する必要がある場面は多くあります。でも、私はその言葉が様々な、大切なものを見えなくしてしまうことにも気づきました。私のように、東北に直接的なつながりがない人は特にそうだと思います。「被災地」「被災者」と呼ぶだけで、長い歴史や伝統、人々の営みも全部、震災につなげてしまう。震災ありきの話しかできなくなってしまうのです。

震災で大きな被害を受けたことは忘れてはならない事実です。でも、その場所や人々を語れるような、もっと違う言葉を持っていたいとも思っています。そして、東北のイメージが震災で止まってしまっている人は、ぜひ一度東北に足を運んでみて。震災で止まってしまった東北のイメージが少しでも変わったらいいなと思います。そしてこの記事も、そのきっかけの一つになったら嬉しいです。

震災対談

2011年3月11日 あの時あの瞬間

2011年3月11日。

皆さんはどこで被災をし、どんな経験をしましたか？

有志が集まったこのプロジェクト。メンバーはそれぞれ違う経験をしましたが、あの日、あの瞬間を全く同じ場所で過ごしていたメンバーがいました。その時のエピソードを対談形式で語っていきます。

(対談日：2020年5月4日 Zoomにて)

<対談者>

粥川 颯人 かゆかわ・はやと

東北大学農学部。震災から10年を目前にし、生まれてから21年間宮城県に居るのに、これまで震災からの復興に何も携われていなかったことを痛感。震災からの復興、未来への伝承などのために力になりたいと思い、Project San-Elevenに参加。



宇野澤 茜 うのさわ・あかね

電気通信大学情報理工学域化学生命工学（対談当時は新潟大学工学部）。代表とはFacebookを介して知り合い、この企画の運営に携わることになる。大学進学にあたり住む地域が変わったことで周囲の人と震災に対する考え方が異なることに違和感を抱き、実体験を基に様々な人に改めて震災について考えてほしいと思い、このProject San-Elevenに参加することを決意。



震災当時は粥川が小学4年生、宇野澤が小学5年生で、二人とも同じ仙台市泉区の小学校に通っていた。

―当時二人が住んでいた場所の状況―

宮城県仙台市泉区鶴が丘
・海まで約10km地点
・丘陵（1km四方の標高差が概ね200m以下の斜面からなる）であり、地盤は比較的に液状化はしにくい。

―プロジェクトに参加するまで―

宇野澤 粥川君はどうしてこのプロジェクトに参加しようと思ったの？

粥川 生まれも育ちも宮城で、震災が身近な存在だったのに何もできていないと思っていた。そんな時に先輩がこのプロジェクトのメンバーを募集していることを知り、参加することを決

めましたね。茜さんは？

宇野澤 私もほとんど同じ動機ではあるかな。今までも震災関連の企画や活動に参加してはいたけれど、自ら発信することはあまりなかった。10年目という節目ということもあって、こうして目に見える形で、次の世代に当時の生々しい声を残すことに意義を感じたから参加しようと思ったよ。正直、外部からの参加だったから当初は戸惑ったけれど、快く迎え入れてくれてとても感謝しています。でもまさか当時同じ場所にいた人がいるとは思っていませんでした（笑）。

粥川 僕も驚きました（笑）。名前を見た時、「あれ？もしかして……。」と思って。お声をかけて良かったです。

―時系列ごとに追っていく―

<前々日>

宇野澤 前日とか前々日とかに結構大きい地震あったよね。地鳴りがしたと思う。

粥川 前々日にありましたね。あの時実験しててみんな実験台の下に潜った記憶がありますね。

宇野澤 揺れたよね。嫌な予感がしたんだ。あの時地鳴りがあって、徐々に揺れがきて、1回爆発的な横揺れがあって、立てなかった記憶がある。

<当日>

宇野澤 粥川君はどの辺に座ってた？

粥川 机がコの字型にあって黒板の正面に座ってましたね。

宇野澤 結構人いたよね。

粥川 地震あって何分かくらいは放送鳴ってたんですけど、電気と一緒にぶちって切れて。あの時が一番怖かった記憶があります。

宇野澤 あの時先生っていたっけ？

粥川 あの時はいませんでしたけど、揺れてる間に来てくれましたね。

宇野澤 定期的に避難訓練してたけど、いざ揺れた時は必死になって慌てて階段降りたっていう記憶がある。整列なんてしてる暇なかった。

粥川 そうでしたっけ？何だかんだ並んでた記憶はあります（笑）。

宇野澤 そうだっけ（笑）。

粥川 あとは揺れがめちゃくちゃ長かったです。体感5分、いや10分くらいかな。

宇野澤 うん、揺れは長かった。第二波的なものが来てたし。横揺れも縦揺れも両方来てた？椅子につかまっていたけど、それ自体も動いちゃってたから。

粥川 僕は机の下にいましたけど、机をおさええていても脚が浮いちゃいましたからね。

宇野澤 私は黒板書記だったから周りに椅子しかなくて、それこそ頭隠して尻隠さず状態で、ものが当たって痛かった記憶はある。まだ会が始まる前だったんだよね。

粥川 始まる前でしたね。

宇野澤 で、私は議題を書こうとして背伸びしたときに地震が来た。でも小学生だったからか、そんな恐怖心となく笑ってる子もいたなあ。私は号泣したけど。やっぱり今とあの頃では感覚が違うのかな。

粥川 違うでしょうね。

宇野澤 あの地震を経験せずに、もし今あれが来てたらどういう対応をとるのかな……。結局対応自体は変わらないのかな？

粥川 そんな気がします。でも当時のものすごいことを経験した割には冷静だったなっていう感じがあって。やばい状況なんだけど、実際に起きているのが信じられないからパニックにならなかった。

宇野澤 あれだけの地震はそれまでなかったからね。大きな地震が来てガラスの破片の音がした瞬間は、親が家で食器棚の下敷きになっているんじゃないかって、いやな想像をしちゃって、それでだめだったね。校庭に避難してみんな親御さんとか来てる中で、私だけ迎えが全然来なくてそれがさらに不安を大きくしたかな。

粥川 僕の親が迎えに来てくれたのは中盤くらいでした。母が教員だったので「しばらく来ないのかなあ」とか思ってたんですけど、思いのほか早く来てくれました。当時の担任の先生に「今お母さん大変かもね」と言われてたこともあって夜まで待つ覚悟だったんですけど。

宇野澤 じゃあ私と逆か。そのあとお母さんは学校に戻ったりしたの？

粥川 いや、戻ってないです。

宇野澤 あるとき雪降ってたよね。歩いて帰ったの？

粥川 その記憶がないですよ。

宇野澤 同じ小学校でも、人によっては帰っている途中で地震が来た人もいたからね。煉瓦とか落ちてきて大変だったって話も聞いたことがある。

校庭に避難したときに車いすに乗っていた方のラジオから津波の情報が聞こえてきて、それでようやく津波で大変なことになるって気づいた。でも停電していて実際どんな感じかわからなかったから、電気が復旧してテレビ

で見た津波の恐ろしさは今でも忘れられない。あれはもう言葉が出なかった。

粥川 うちは車に取り外しできるワンセグがついていて、あの日は父が帰ってきてからそれを見てました。仙台港が燃えている中継がずっと流れていて、震災の記憶の中で一番ショッキングなものがそれなんですよ。こんなになっちゃうのかって。

宇野澤 確かに。同じ震災で、しかも同じ県なのに自分の住んでいるところと全く違う光景がテレビの中で広がっていることがショックというか、信じられなかった。当時は親戚とか友人が幸い被害の大きいところに住んでいなかったから実感湧かなかったけど、高校に入ってから気仙沼とか岩沼に住んでいる友人から聞いたり、沿岸部の方から来たっていうのを聞いたりするだけで当時のことを思い出した。あの時すごかったんだっていうのは震災以降にじわじわ感じた。

粥川 そうですよ。テレビとかで当時中継やっている時も、文字通り信じられないというか、「本当にこんなこと起きているの？」っていう感覚はありましたね。

宇野澤 震災当日から4、5日は鶴が丘の入り口のコンビニは壊滅的だったらしい。

粥川 そうだったんですか？

宇野澤 壊滅的というか、荒らされて

いるっていう感じ。みんなが必死にものを買い求めるから、トラブルが多かったって聞いた。盗難とか、誰かのコートが盗まれたとかも。

粥川 何日か後に松陵方面のスーパーに歩いて行ったんですよ。そこで一人5品までとか商品の購入制限があって、ちょっとでも多く買おうと家族みんなで行きました。そのときは泥だらけの車が何台か走ってて、それが津波から逃げてきた車だったんです。そういう人たちが自分の前に並んでいて、「ここまでくれば大丈夫」と言っていたのが記憶に残ってます。

粥川 あと、ガソリンスタンドがめちゃくちゃ混んでたっていう。

宇野澤 あ、確かに！なんであんな混んでたんだろうね。車で移動するかな？水を汲むためとか？

粥川 公園に自衛隊の給水車とかは来てましたよね。でもとにかくガソリン入れるのは半日くらいかかったと思います。うちはガソリンスタンドに並んだ方がガソリンを食うってことで並ばなかったんですけど、鶴が丘の入り口のガソリンスタンドから500mくらい車が並んでたと思います。あとは地震から数日後に散歩してたんですけど、プラスチックが燃える臭いはずっとしてて。それは結局仙台港で石油コンビナートが燃えた時の臭いが山の中の鶴が丘まで来ていたっていう。

宇野澤 え、そうなの？それはすごいわね。

宇野澤 震災後しばらくは簡易給食だった。

粥川 簡易給食ですか？

宇野澤 パンと牛乳しか出てなくて、おかずは自分で用意するっていう期間が結構続いて。

粥川 あ！ありました！ありました！当時はまだ鶴が丘にいましたね。

宇野澤 懐かしいな。

西日本の小学校から千羽鶴送りましたみたいなものとか、仙台市の小学校の合同プロジェクトとかあったけど、あれは役に立ったかわからない（苦笑）。

粥川 そのときはもう転校してましたね。同じ仙台市内の貝ヶ森っていうところなんですけど。

宇野澤 貝ヶ森とかの被災状況はどうだったの？地盤とか。

粥川 地盤はそんな緩くなかったです。鶴が丘よりも水道の復旧は早かったですね。ただ、瓦が道に落ちたりしていました。当時、祖母が貝ヶ森に住んでいて、一人にするのは心配だからということで1か月くらいは一緒に鶴が丘に来てもらいました。

宇野澤 震災の時、電気・水道・ガスが止まったときはどうやって過ごしてたの？

粥川 お風呂に水ためて、トイレとかはそれで流してました。飲み水と

かってどうしてたんですかね？体は濡れタオルで拭いてましたけど。

宇野澤 確かに、飲み水どうしてたんだろう。買ったのかな？何を食べてたのかも覚えてないんだよね。

粥川 当日はガスが使えるうちに鍋を作りましたね。夜は鍋を食べたっていう。

宇野澤 私の家では夜はろうそく囲んでトランプしてた（笑）。

粥川 トランプですか（笑）。

宇野澤 手作りラジオをずっと回していたんだけど、入ってくる情報が怖くて。地震の状況とか行方不明者の情報とか。全く音がないのも嫌だったから複雑な気持ちで手回しラジオを回した記憶がある。

粥川 あと、雨水を飲料水とか生活用水に使おうと思ったけど、結局原発事故でやめたっていう。さすがに放射線が怖いと。

宇野澤 そういえばあの時、最初の頃は福島原発の話言ってなかった気がする。

粥川 そうですよ。ずっと津波、津波で。ただ、原発冷やすためにヘリで水かける中継がされていてそれをずっと見ていた記憶はあります。

宇野澤 そうね。でも、津波とかで頭がいっぱいだったから、原発までに気が回らなかった。

—震災後、変わったこと—

粥川 僕は震災が起こって数年は「ただの事象」とか「災害」とかとしてしか捉えられなかったんですけど、ここ数年でどんどん本当にめちゃくちゃだったなという感覚が強くなっていきます。

宇野澤 私もそうかも。私は2008年の岩手宮城内陸地震のときの記憶も残ってて、それは地震単体としての怖さが大きかった。でも、3.11のときは地震もだけど、津波とか原発とかの二次災害がとても大きかったから、それがより地震の恐怖を強めてる。私も年を経るにつれて、当時の震災を知らない世代が増えてくることでこの経験を伝えなきゃいけないという責任感がかなり増してきている。だから、できることは限られているけど、「震災を経験した身としてできることをやっていかなきゃな」という気持ちはどんどん増しててる。

粥川 めっちゃわかります。

宇野澤 今、新潟で海に徒歩5分で行けるところに住んでるんだけど、去年の5月に地震も来ている。震災の時は山にいたからなかったけど、今は津波で死ぬんじゃないかっていう恐怖もある。でも、こっちの人たちとか関東の人とかは東北と違って危機感が薄いんだよね。「あ、地震来た。家にいればいいか」みたいな。やっぱりそういう

危機感の違いを感じるから、宮城県民として伝えていくべきことはあるし、体験した人から直接発信されたことって心に響くと思う。だから、震災を伝える役割として貢献することが、今私ができる最善のことなのかなって。

粥川 あと、これは自分自身に対しての行動の変化ですけど。一昨日、自転車で川を下って海に出たとき、海の匂いがするところまで下ったら「今津波来たらどうしよう」とか自然に考えるようになりましたね。

—震災を知らない人たちに伝えたいこと—

粥川 “てんばらで逃げろ”ですかね。

宇野澤 てんばら？

粥川 父親が震災前から言っていた言葉で、「てんでばらばらに逃げろ、他人のことは気にするな」ということだそうです。その言葉がずっと何代も前から受け継がれてきてたらしく、父よりも上の世代の人が子供の時、津波の話がされている時にふざけてたら箸でぶったたかれたっていう話もあるみたいです。でもそういうのが伝承かなと。海に行くたびに思うんですけど、むやみやたらに防潮堤造ろうとする人のことを僕は理解できなくて。人の手で全部コントロールできると思うなよって。女川は震災の時、防潮堤ごと流されたみたいですから。

宇野澤 その言葉知らなかった……。でも確かに、当時子供が家族のことを気にかけてしまって避難が遅れたことで両者とも流されてしまったっていう話を聞いたことがあるなあ。家族のことが心配な気持ちもとてもわかるけど、個人個人が大切な自分の命を自分で守ることも大切だよ。私から伝えたいことは、“決してこういった震災体験を他人事にしないでほしい”ということ。地震に限らず、災害の多い日本では、いつ何時どこで何が起こってもおかしくない。たとえ万全な準備ができていなかったとしても、ある程度の「身構え」は必要だと思う。この対談を通して、少しでも多くの人に当事者意識をもってもらえたら嬉しい。

【編集後記】

こうした対談記事を書いたのは初めてで、まとめるのに少々手こずることもありました。しかし、当時の記憶をここまで掘り下げて振り返るのは新鮮な体験でした。そしてこんなにも鮮明に記憶が残っていたことに自分自身驚きました。今後も自分の経験を形にする活動ができればと思います。（宇野澤）



PODCAST PROGRAM

しゃべる、さんいれぶん



SAN-ELEVENのメンバー一人ひとりの思いやプロジェクトの裏話が生声で聞けるPodcastを収録しております！

#1 女川記事の裏話

JR女川駅の横にある「ホテルエルファロ」の紹介記事の裏話をお送りします

#2 しんさいTALK

中学からの同級生と震災の経験について、震災後の車中生活や家族との話などをゆるっと語ります。

#3 SAN-ELEVENの誕生秘話

SAN-ELEVEN代表と勝手に女川観光大使が「SAN-ELEVENの誕生秘話」について語ります。

#4 島で芋掘り

NPO法人スマイルシードさんが提供する「応援野菜」、そして思わず焼き芋が食べたくなるお話をお届けします。

#5 東北出身、仙台で暮らして思うこと

仙台で暮らして感じた「地域差」について真剣に語る。仙台出身じゃないからこそ気付いた認識の差、その溝がもたらす悲しみとは。

#6 DO YOU THINK SENDAI IS "SAFE"?

seek how to overcome such a bias and invite people.

#7 ボランティアってハードル高くない？

「ボランティアしてみたい！でもやったことないかも…」という皆さんが共感できそうなワード満載のトークです。

#8 女子大生2人はこうして被災地へツアーを決行した！

被災地へのツアーを計画し、実際に主催した2人。高校卒業後、地元・宮城の大学と東京の大学にそれぞれ進学した2人ですが、果たしてどんなツアーを作り出したのでしょうか？

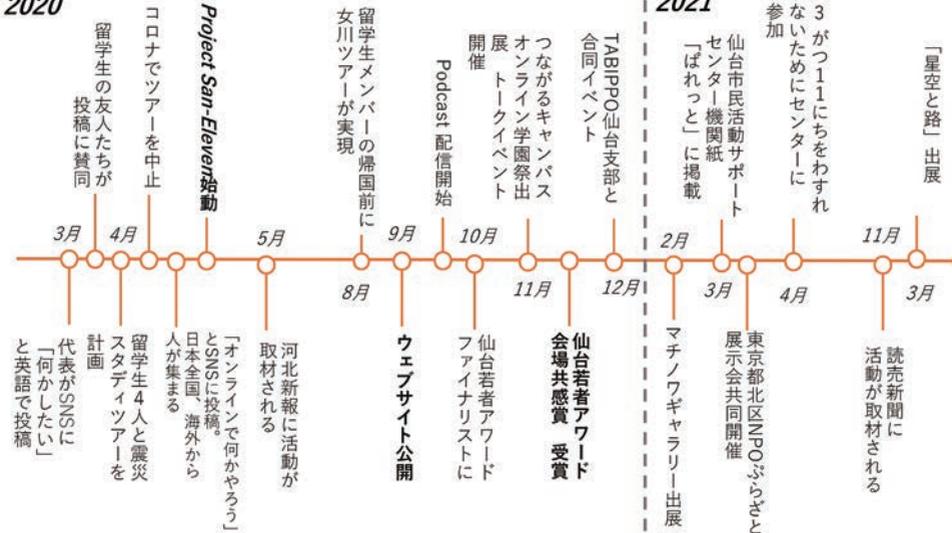


SPOTIFY



iOS

2020



編集後記

この冊子は、主要メンバーの卒業に際してウェブサイト運営を終了するにあたり、どうしても今までの我々の活動の足跡を後世に残しておきたいという私の強い想いから作成が始まりました。いざ作業を始めると、メンバーは皆冊子制作など全くの未経験からのスタートで右も左も分からず行き詰まる事が多く、冊子を作る事自体断念しようと思ったこともありました。それでも試行錯誤を重ね、こうして形にできたのは、Project San-Elevenのメンバーをはじめ、体験談を寄稿して下さった皆様、冊子を作りたいと最初にご相談させていただいた時からずっと応援していただいている仙台市市民活動サポートセンターの皆様、そして3がつ11にちをわすれないためにセンターの皆様の多大なるサポートのお陰です。心から感謝申し上げます。

編集担当 宇野澤茜

つむぎだす 若者の記録

～国内外の学生による10年目のダイアログ～

2022年3月発行

企画・制作

Project San-Eleven

編集

宇野澤茜、粥川颯人、崔原榮、濱谷菜佳、峯村遥香

装画

宇野澤茜

デザイン

渡邊博一

寄稿

重田百合香、吉池奏乃

翻訳

大友沙紀、鈴木彩海

協力

3がつ11にちをわすれないためにセンター（せんだいメディアテーク）

Special Thanks

Alex Vauvel、Atro Sakkinen、手記を寄せてくれた皆様、仙台市市民活動サポートセンターの皆様



PROJECT  SAN-ELEVEN